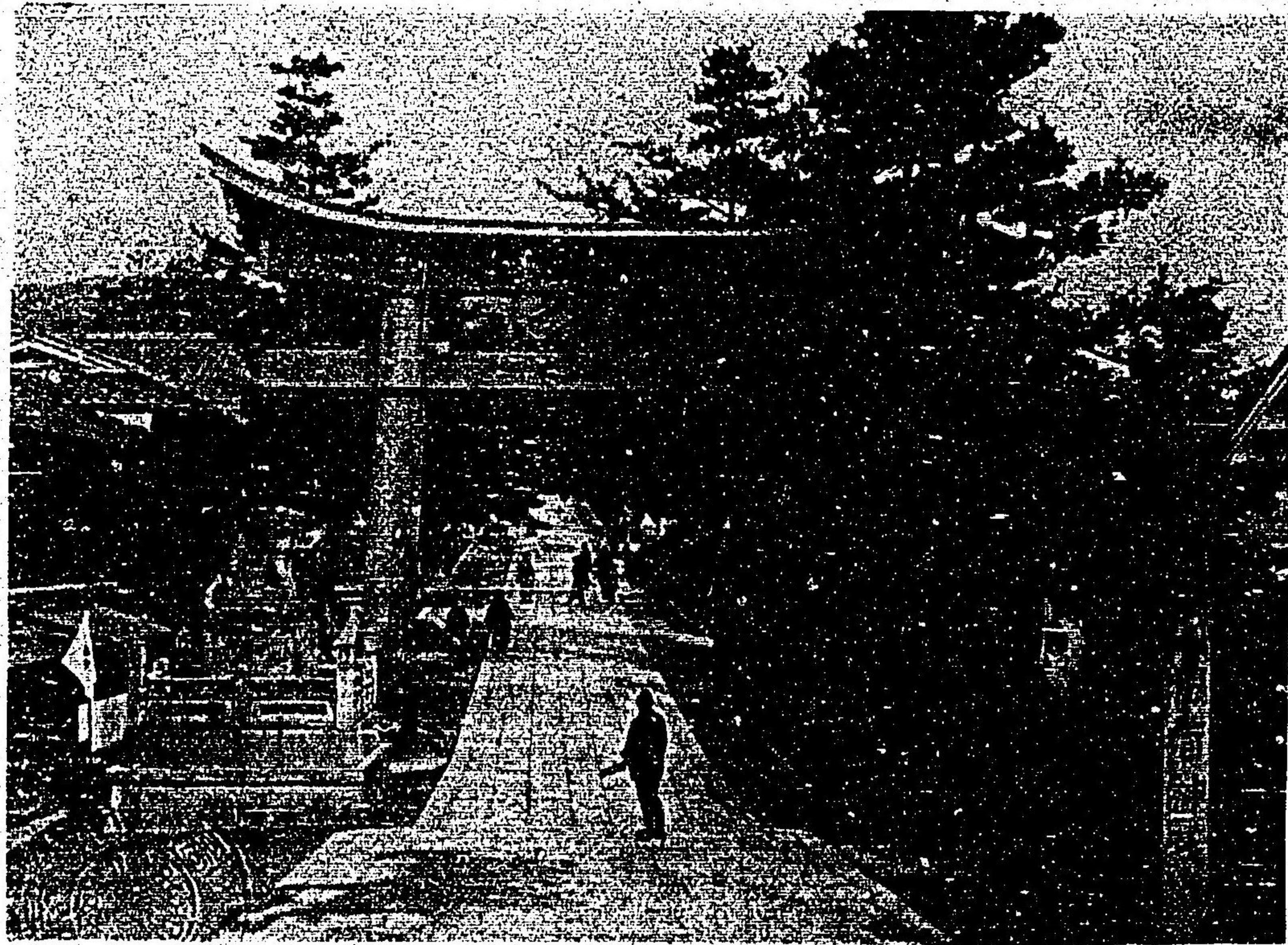
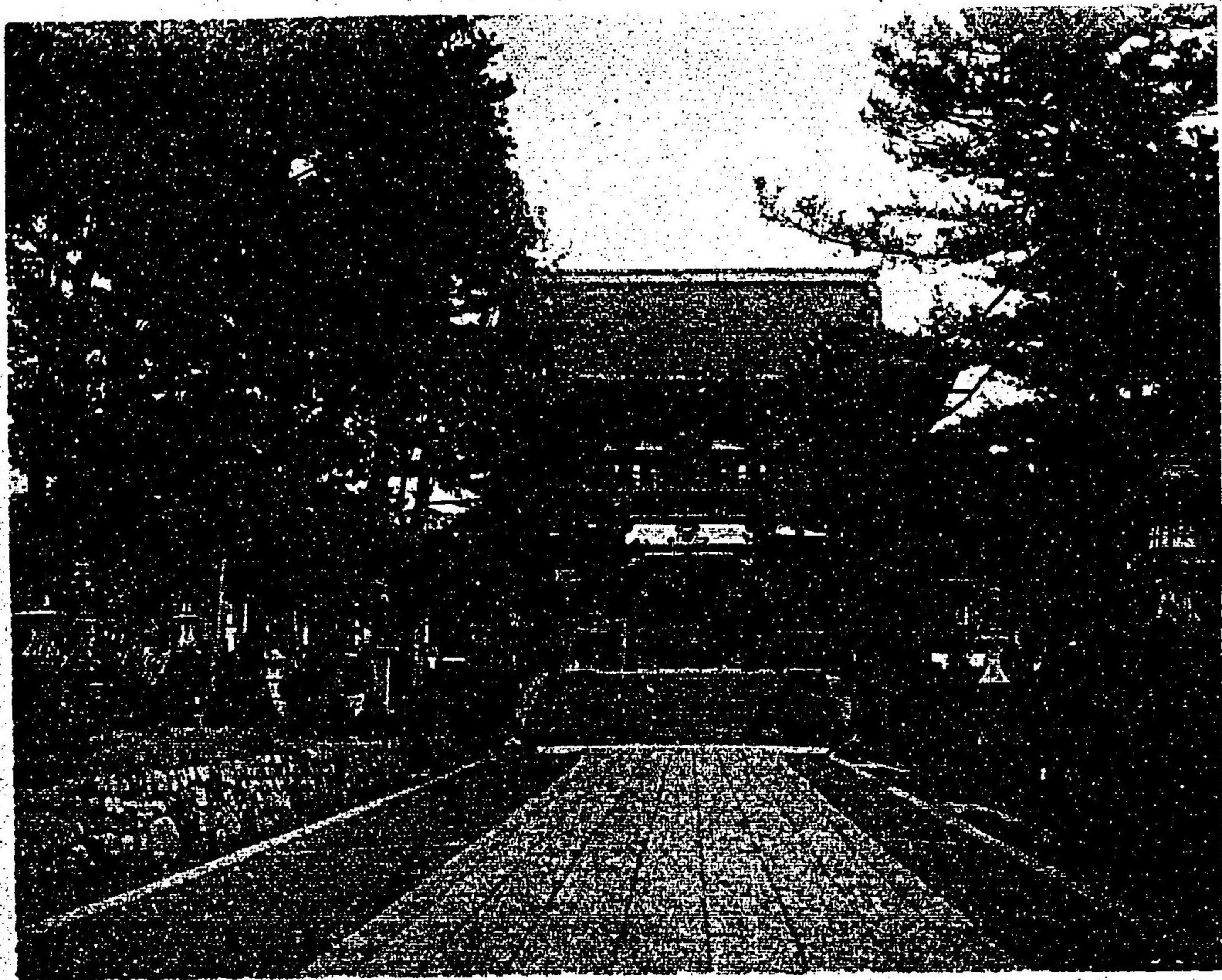


10-551

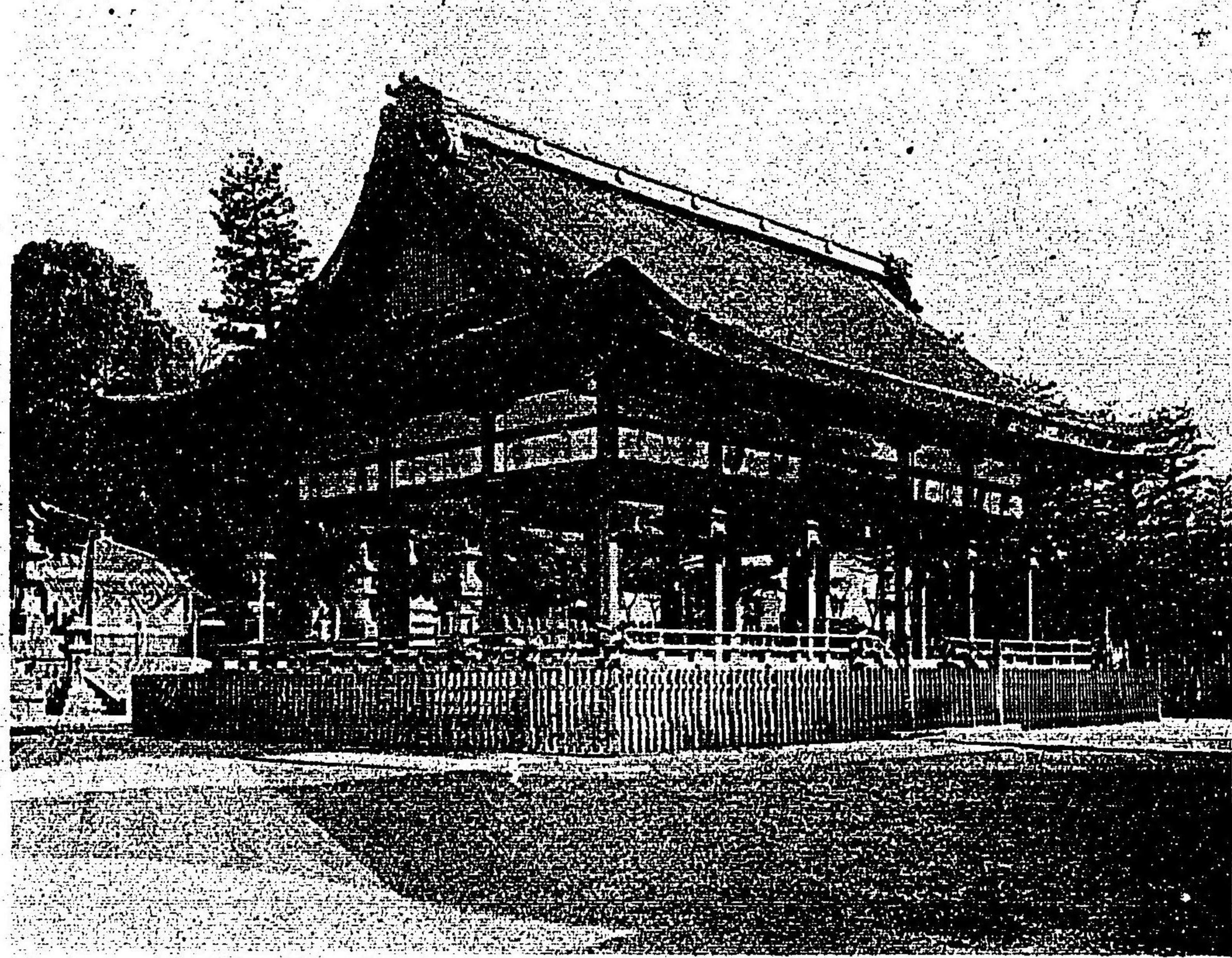
表馬場

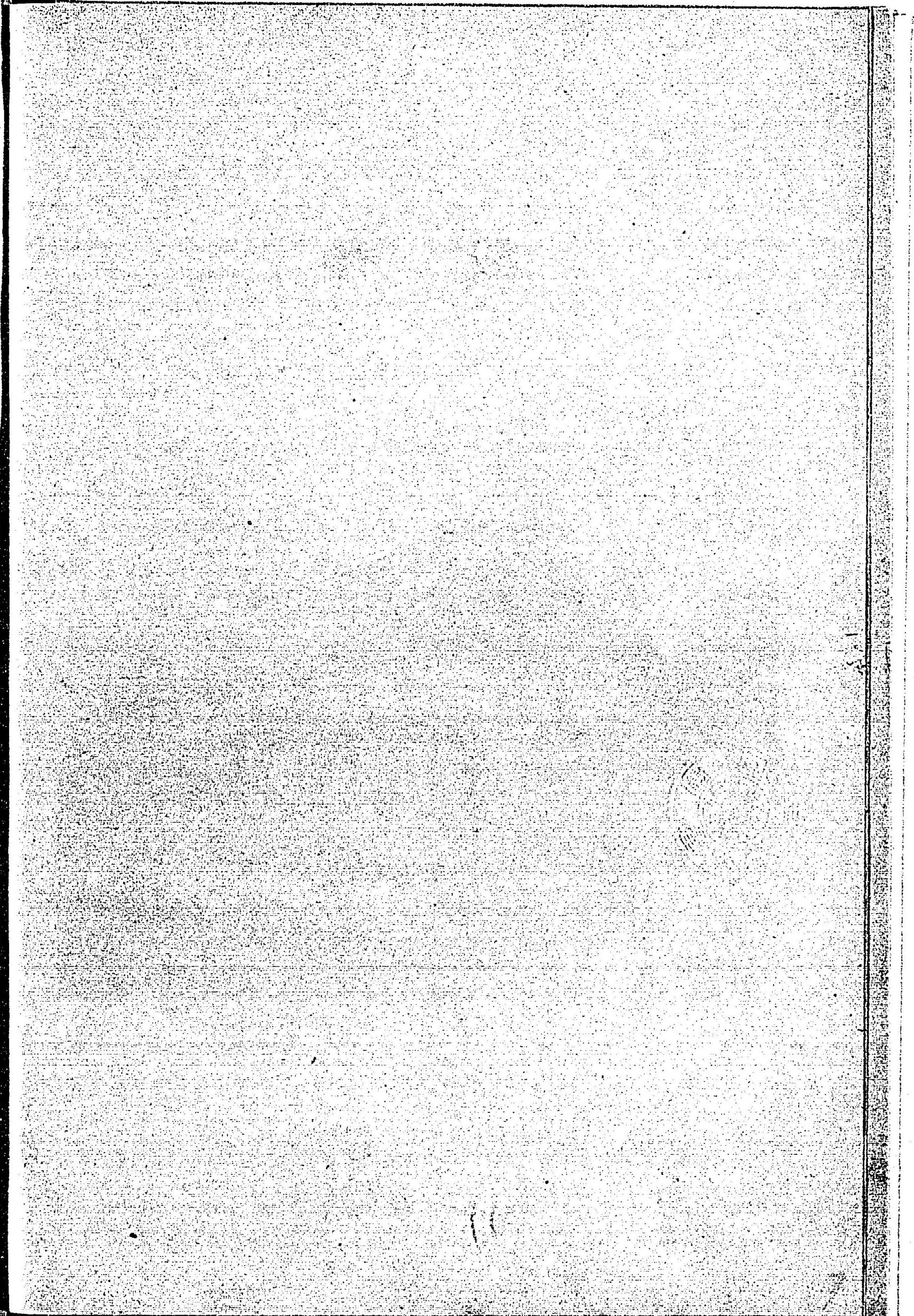


樓 門

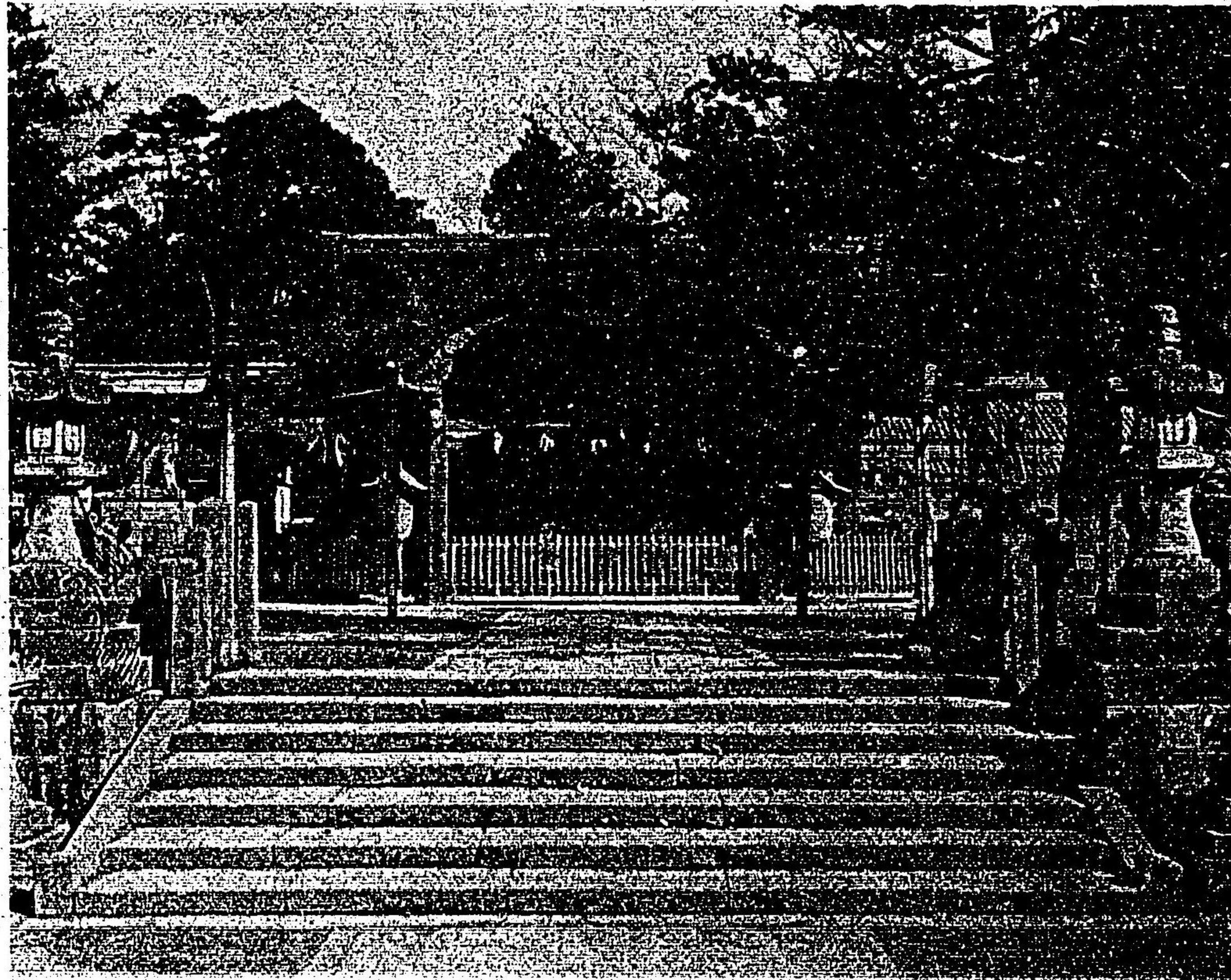


拜殿

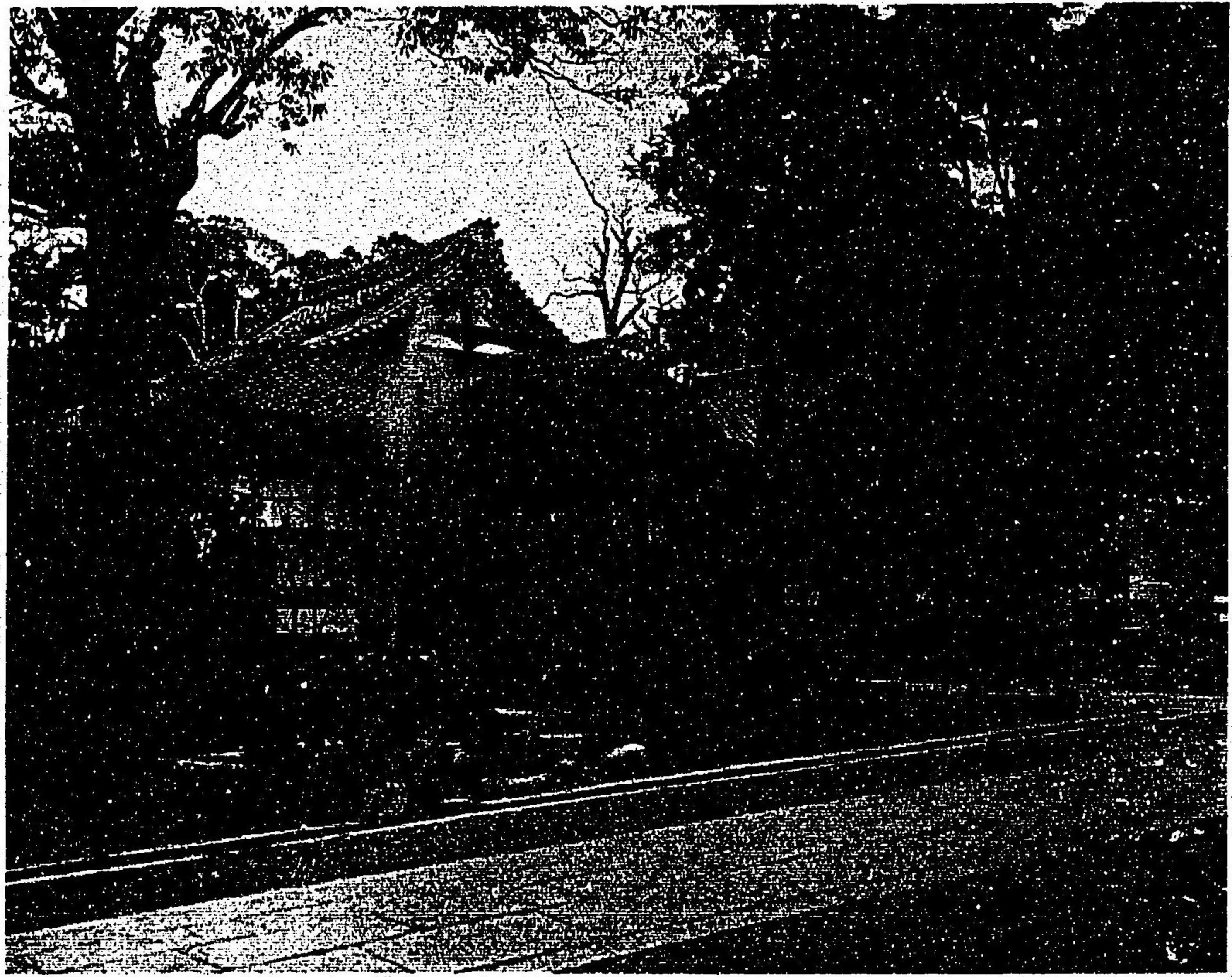




社 本



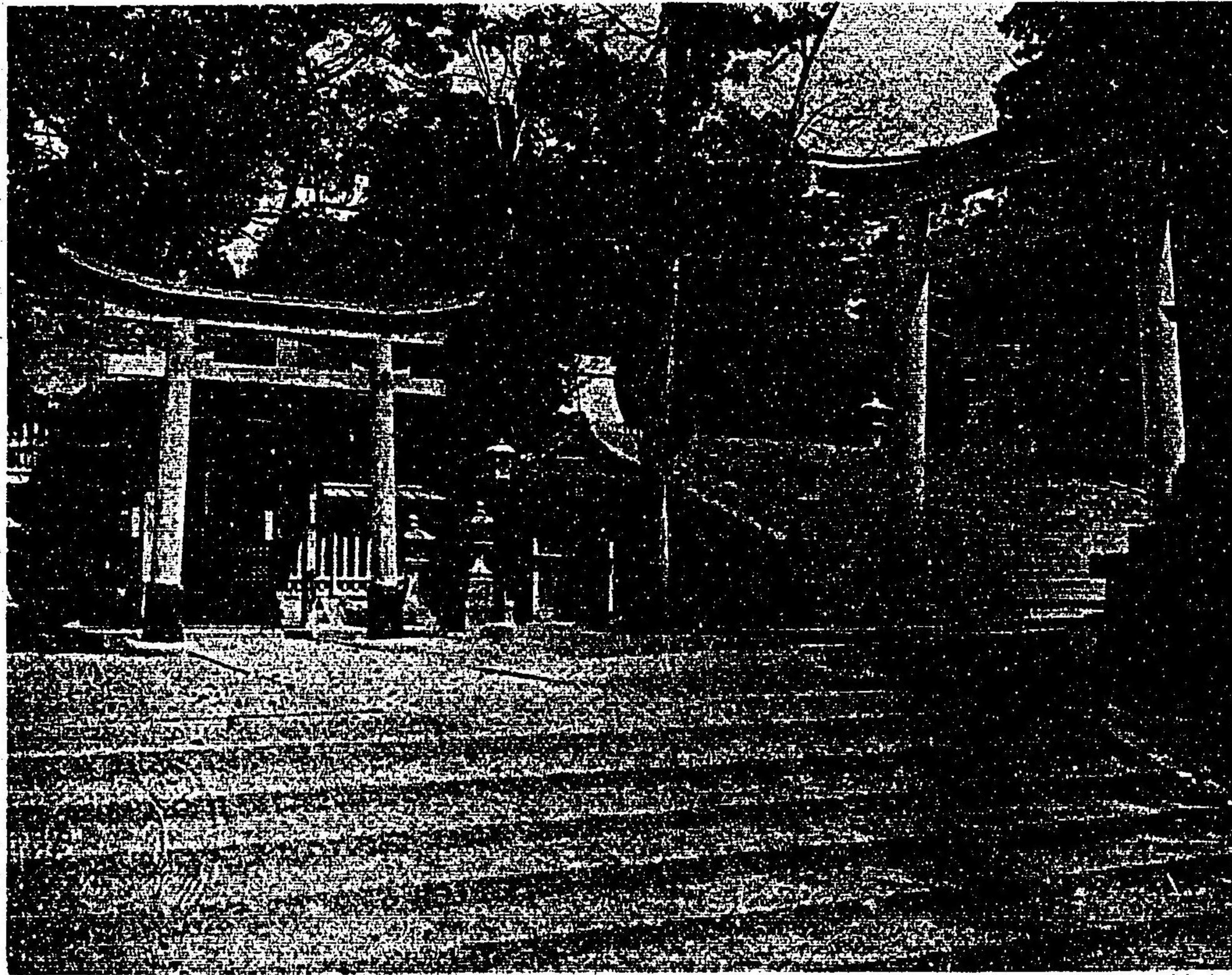
社務所



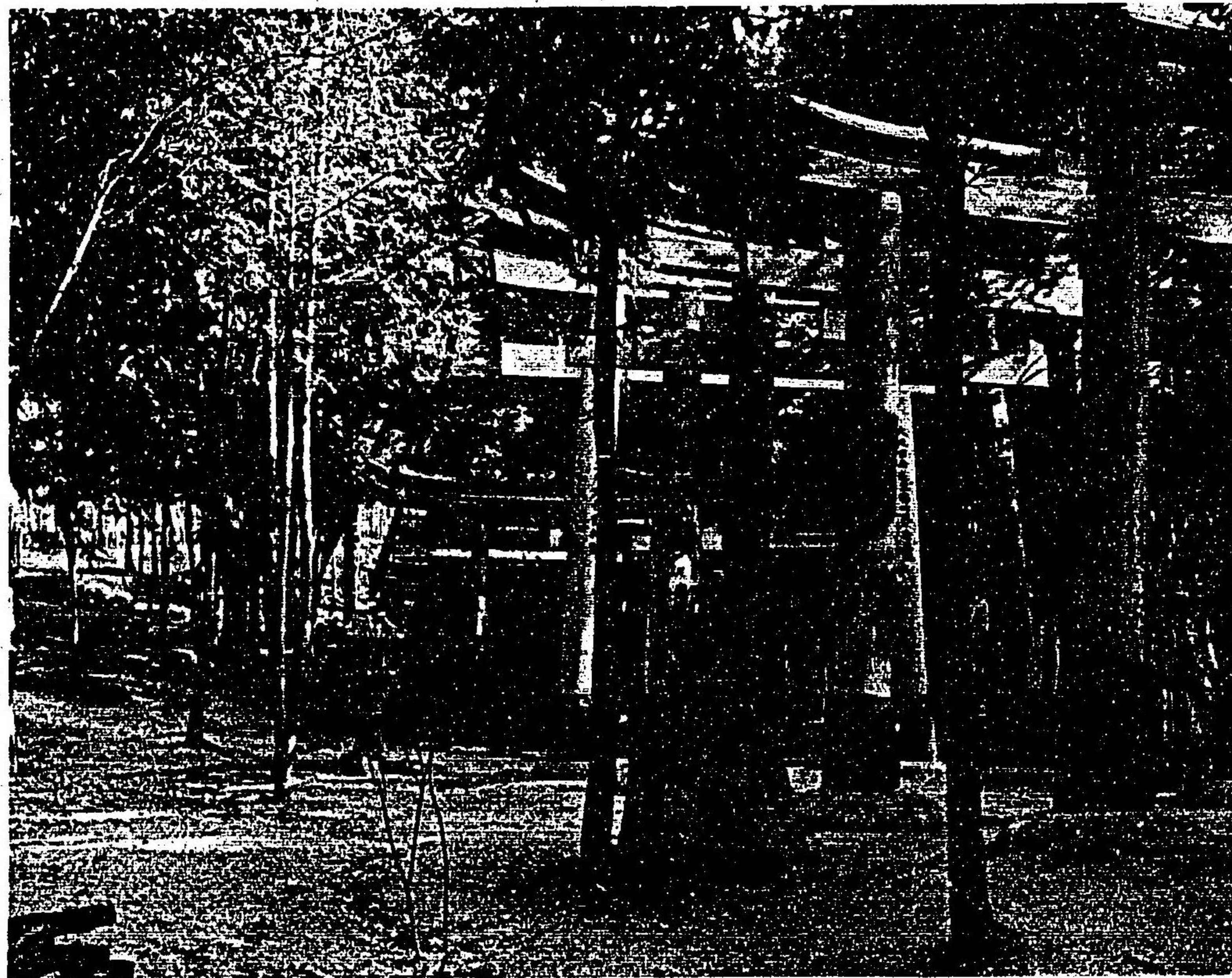
能樂堂



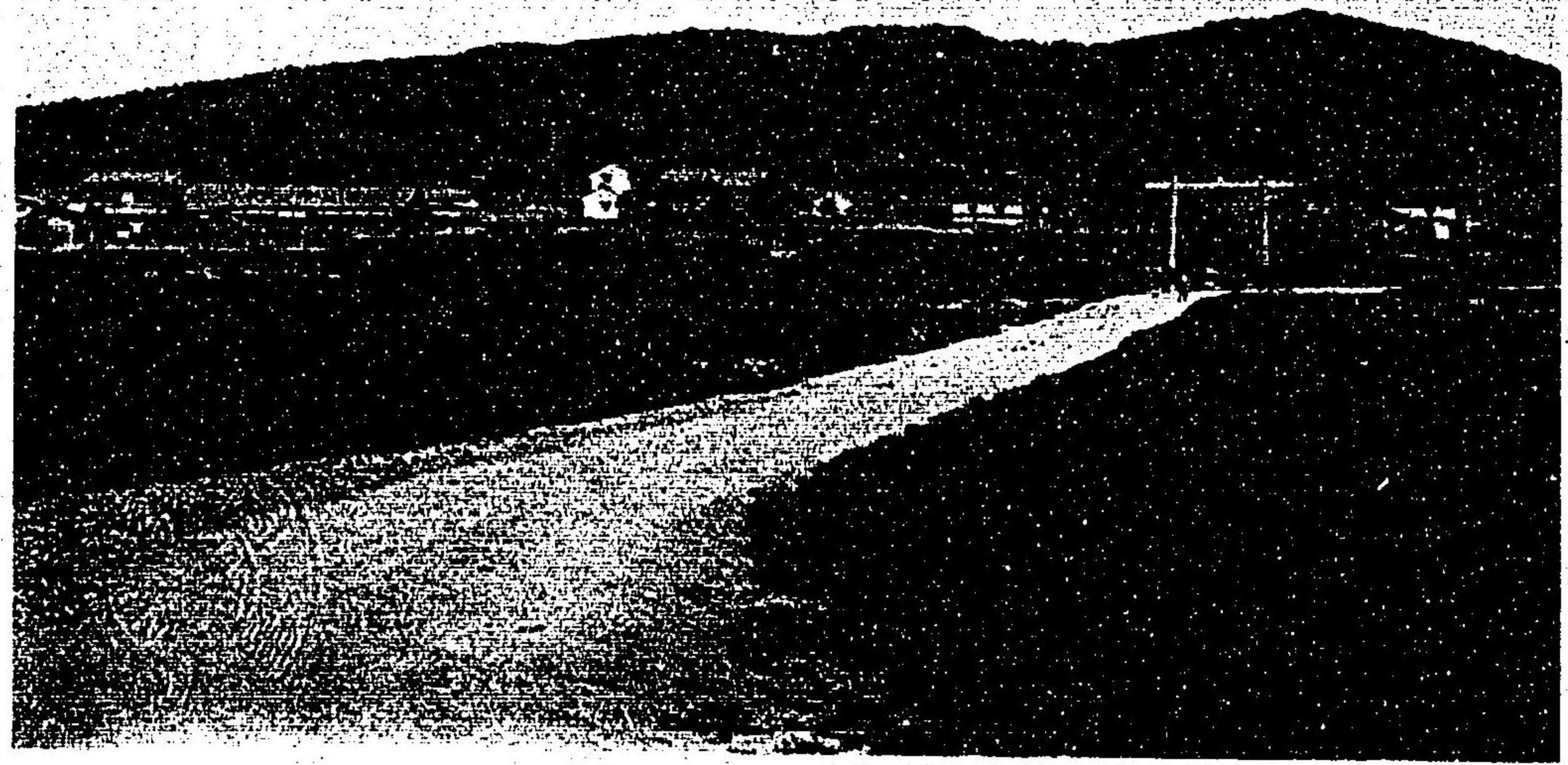
宮 奥



谷 婦 命

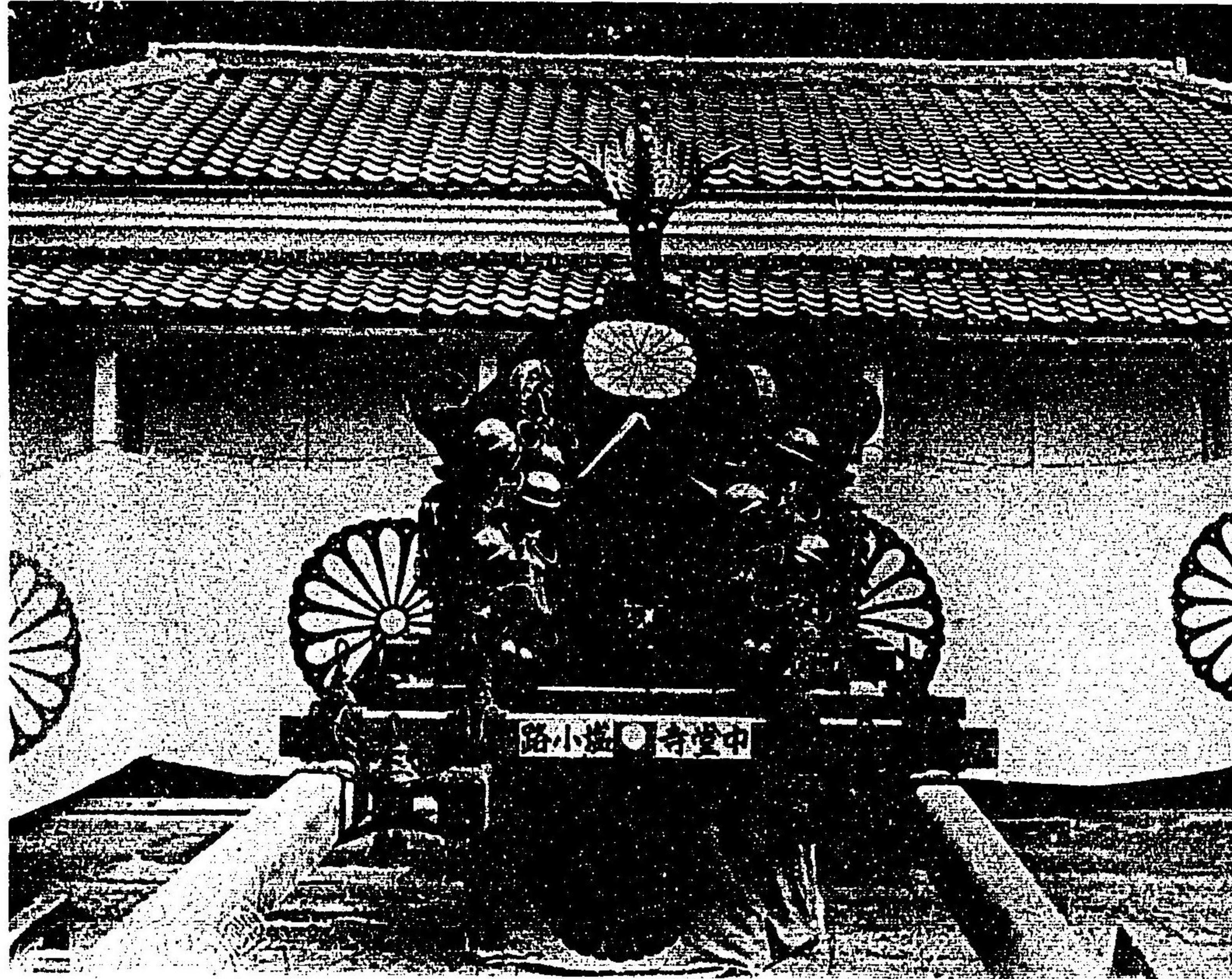


景遠山荷稻



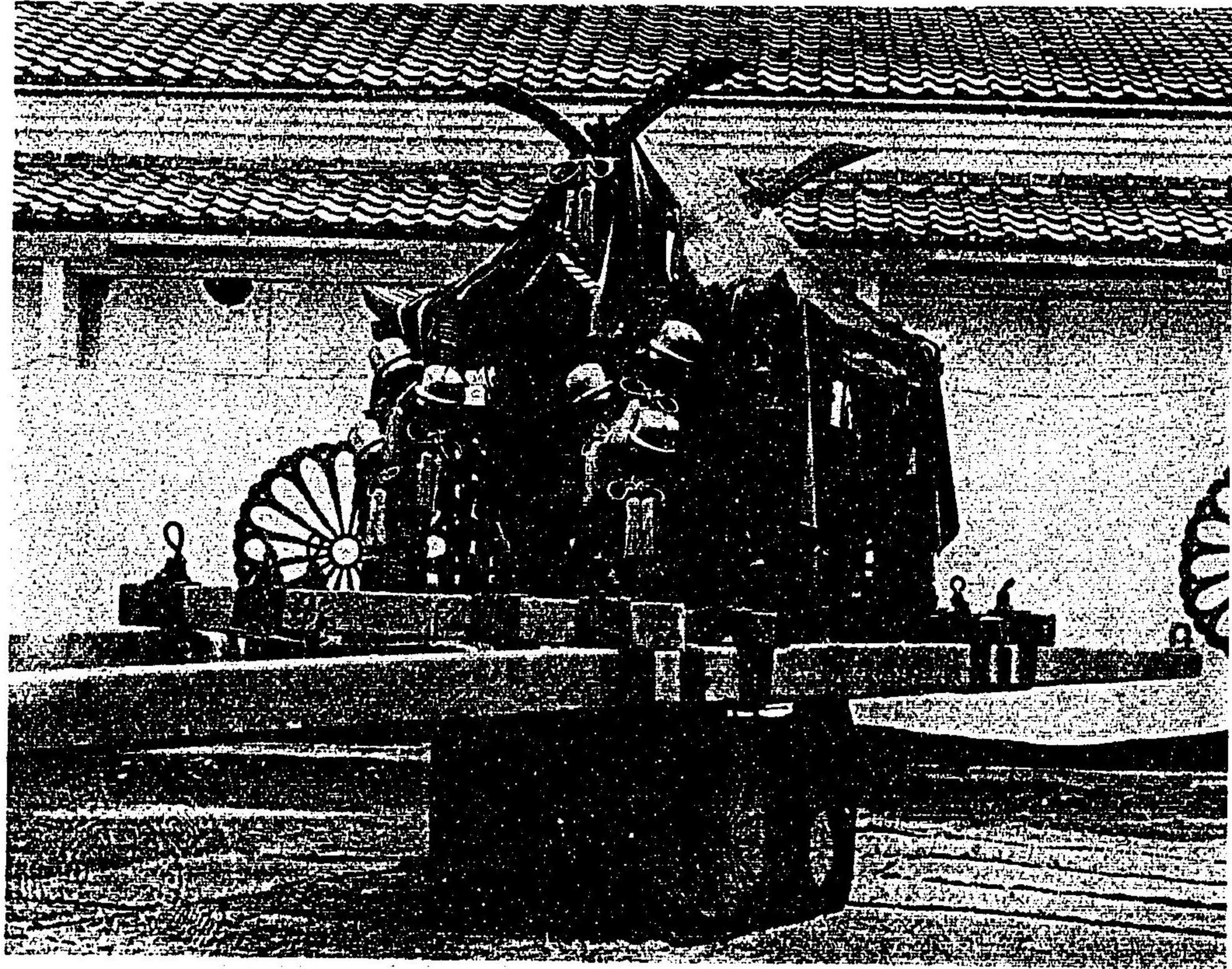
下神社輿

中堂寺塩小路受持



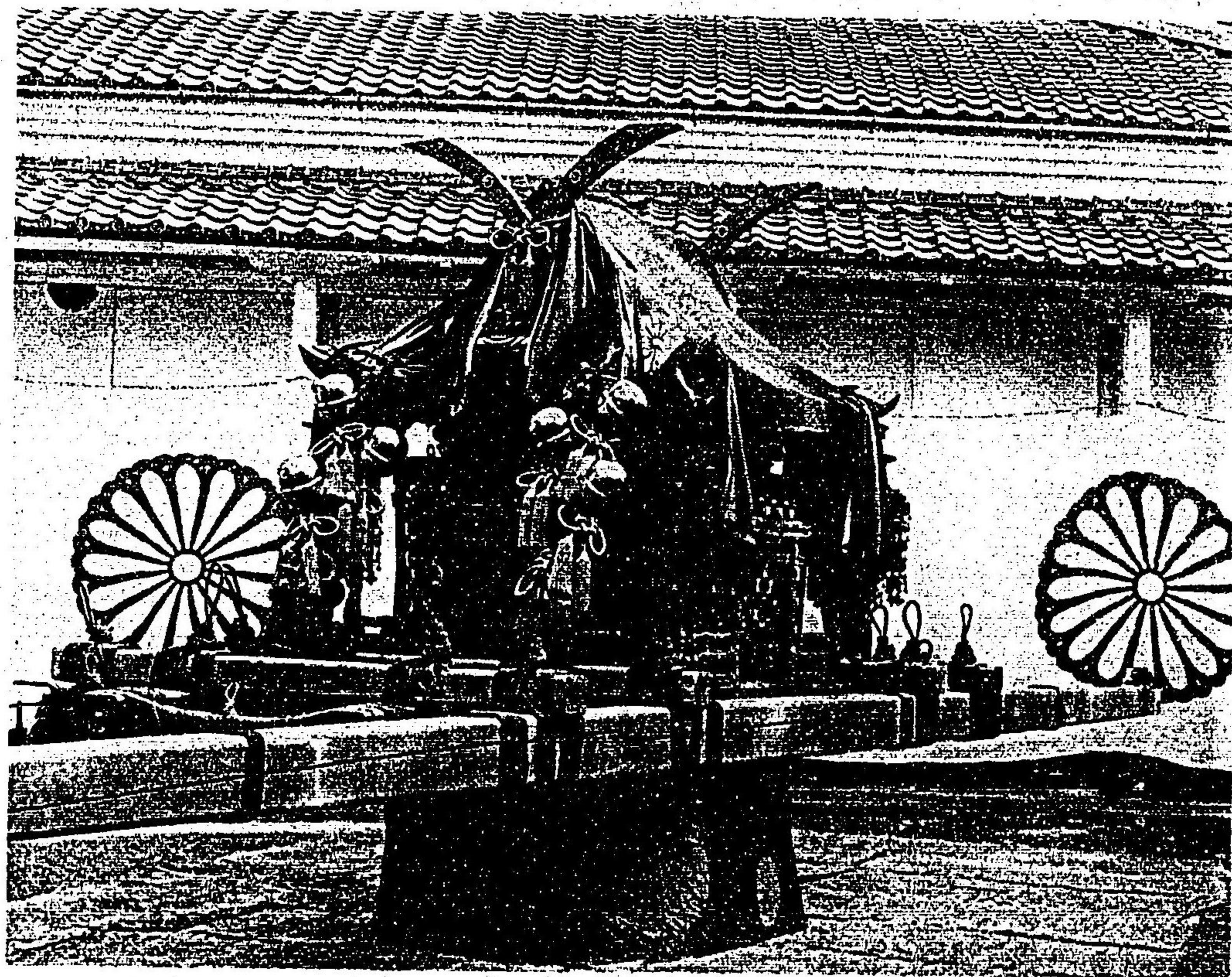
中社神輿

西九條受持



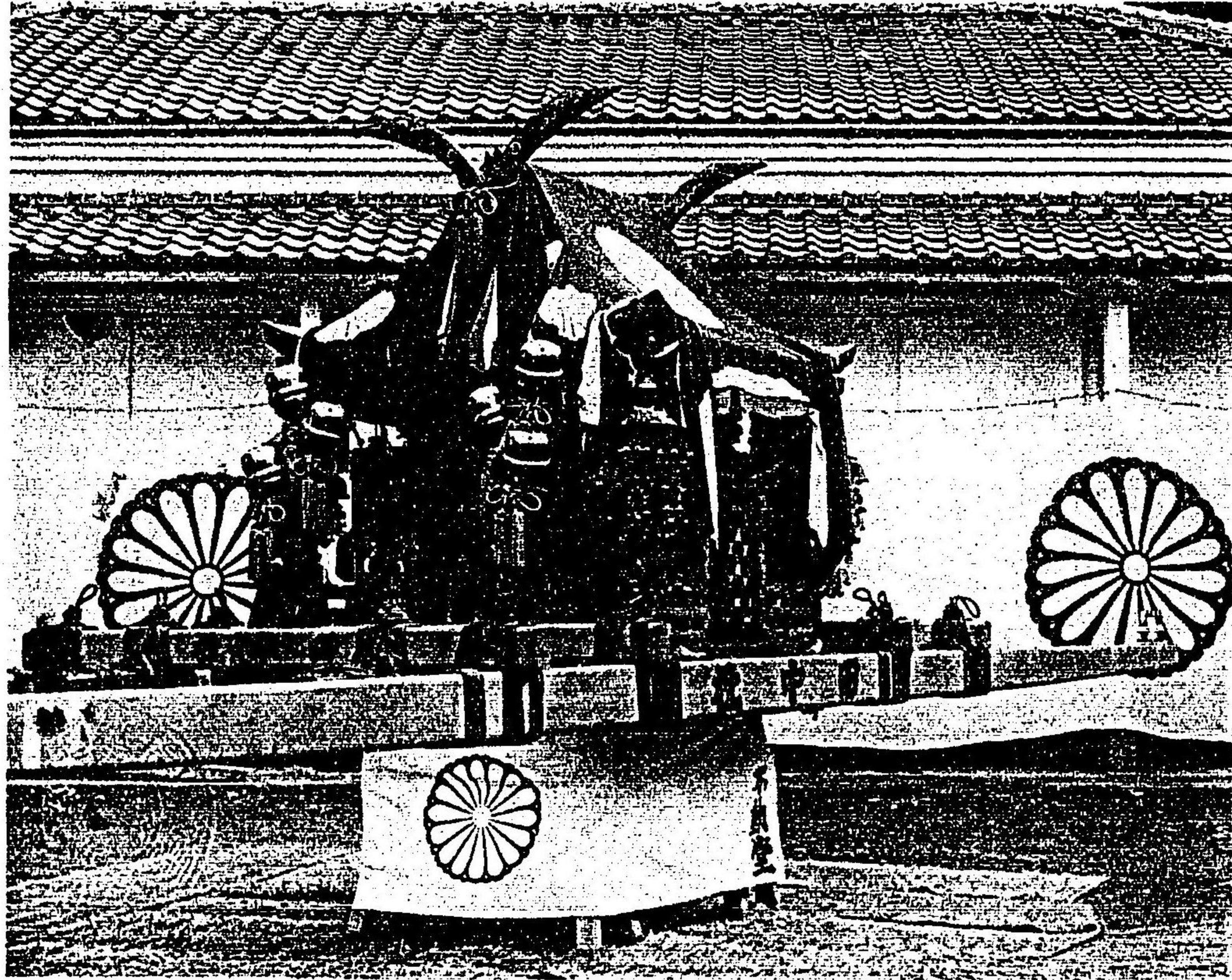
上社神輿

東九條受持



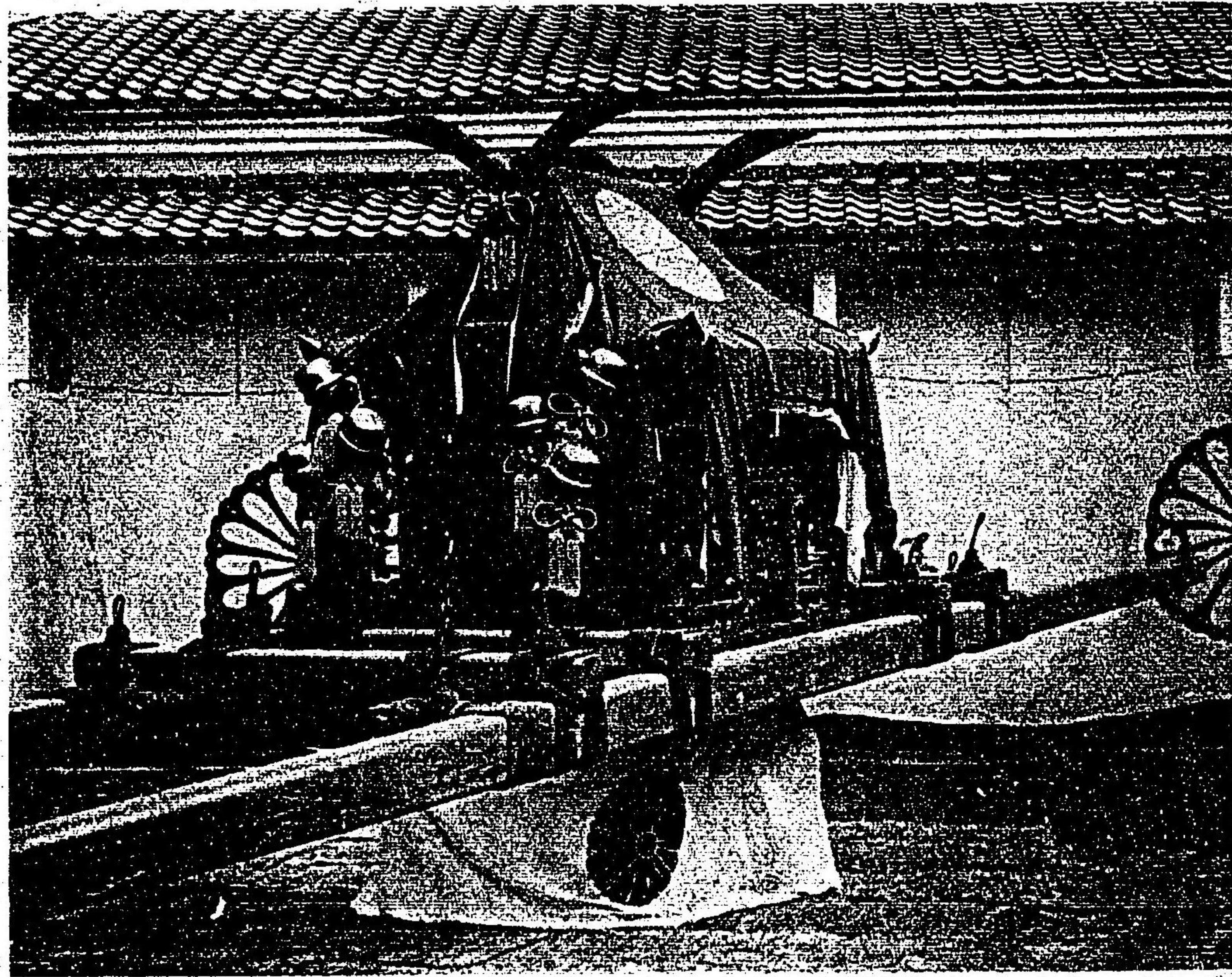
田中神社輿

不動堂受持



四大神輿

八條受持



10-561

稻荷神社志料

緒

道社ハ古來著名ノ神社ニシテ、歴代帝室ノ崇敬及ヒ臣僚庶民ノ尊信最モ篤ク、
四時參拜者四時其蹤ヲ絶タズシテ、稻荷詣ノ稱呼久シク世ニ喧傳セリ、是レ
實ニ神德顯著ニシテ靈驗偉大ナルニ由ルヤ亦多言ヲ須タザルナリ、然ルニ應

仁ノ亂兵燹ニ罹テ、神殿舍屋ト共ニ古記悉ク燒燼シ、之ガ爲メニ由緒殆ンド湮
滅シテ復之ヲ詳傳スルモノ莫キニ至レリ、此ノ故ニ世ノ學者著述家等往々揣
摩臆測以テ杜撰ノ說ヲ傳ヘ、甚シキニ至テハ浮屠氏ノ妄說ヲ採テ之ヲ敷衍ス
ルモノアリ、其弊遂ニ世人ヲシテ往々祭神ヲ誤認シ、真正ノ神德ヲ知ラズシテ
徒ニ無稽ノ迷信ヲ生ゼシム、豈ニ慨歎ニ堪ヘザランヤ、是ニ於テ本職常ニ之ヲ
憂ヒ、正確ナル社志ヲ編修シテ世ニ公ニシ、以テ祭神ヲ明示シ、神德ヲ顯揚シテ
而シテ世人ノ迷想ヲ解キ、且靈地社殿ノ沿革ヲ叙シ、上下尊崇ノ事蹟ヲ證シテ、

明治 37 11 7 内交

誠實敬神ノ感念ヲ喚起セント欲シ、彌宜桑田孝恒ヲ以テ編修主任ト爲シ、主典水室銑之助ヲ副主任、臨時雇竹村尙義ヲ助手ト爲シ、上ハ古事記六國史ヨリ下ハ公私ノ著書記録ニ至ルマデ、泛ク涉獵搜索シテ、苟クモ當社ノ記事ニ關スルモノハ細大之ヲ蒐集セシメ、而シテ部門ヲ分テ類編シテ以テ十有八門ト爲シ、今茲二月露西亞國ニ對スル宣戰奉告ノ爲メ、勅使參向ノ記事ニ終ル、然ルニ社傳既ニ湮滅シテ復之ヲ討究スルニ由無ク、舊神官ノ記錄及ヒ日誌ノ若キハ皆應仁以降ノ叙事ニシテ、往古ノ傳説ニ至リテハ概ネ其據ル所詳ナラズ、且搜索未ダ到ラズシテ、既ニ蒐集セシ書類ノ他猶逸事アルモ知ル可ラズ、故ニ姑ク志料トシテ之ヲ存シ、徐ニ大方ノ裨補ヲ待テ、識者ノ翼贊ヲ得テ、憑據ヲ詳悉シ、而シテ後考證審覈シテ以テ本志ヲ大成セントス、

明治三十七年八月

編者誌

凡例

- 一 此書ハ素ヨリ本志ノ資料ニ備フルモノナルガ故ニ、專ラ蒐集抄録スル所ノ記事ヲ列載シテ、其間苟クモ編者ノ論説ヲ加ヘズ、然レドモ其記事錯綜シテ現今ノ事實ヲ認知シ難キモノ、或ハ緣故來由ノ詳ナラザルモノ往々之アリ、是ヲ以テ卷首ニ之ヲ概説シテ其疑ヲ解ク、
- 一 諸書中、記事ノ複雜或ハ字句ノ錯置、假名ノ誤謬等アルモ、總テ原文ニ從テ之ヲ謄載シ、妄ニ取捨改竄セズ、
- 一 一書ニシテ數卷ニ涉ルモノハ、每卷分載シテ以テ參閱ニ便ス、
- 一 一卷ノ書、又ハ同一ノ記事ト雖、部門ニヨリテ細目ヲ分テ、若クハ年次ニ從テ類載スルモノハ、其重複ニ拘ラズ、之ヲ數所ニ分載ス、
- 一 或ル記事ニ對シテ之ヲ説明シ、若クハ辨駁スルモノ、又ハ輓近ノ小著ニ係ルモノハ、其書名ノ上ニ◎ヲ附シ、一段低下シテ之ヲ掲載シ、以テ主客輕重ヲ分

ツ、

- 一挿註其他編者ノ注意ニ屬スルモノハ、總テ○ヲ附ス、
- 一事ノ帝室朝廷ニ關係スルモノハ、年號ノ下ニ當代天皇ノ御名ヲ挿入ス、
- 一奉幣ハ行幸及ヒ祈請等ト相關聯セリト雖、其首要ニ依テ專ラ之ヲ該部門ニ揭グ、而シテ諸書ニ二十二社若クハ七社奉幣、又ハ祈年穀奉幣ト記セルモノハ、皆素ヨリ當社モ其列ニ在リシユト明ナリト雖、此書ニ列舉スル所ハ、特ニ社名ヲ明記スルモノニ限ル、
- 一驗ノ杉ト稱スルモノハ、其緣故頗ル廣シト雖、殊ニ初午ノ關係最モ深キガ故ニ、之ヲ該部門ニ附ス、
- 一各部門中猶細目ヲ分ツモノハ、鼈頭ニ其目ヲ掲ゲテ之ヲ明ニス、
- 一蒐集書目中、稻荷谷饗記、稻荷社事實考證記、稻荷社古今事實考證、便蒙秘記、羽倉文書竈家中行事等ハ、皆當社舊神官ノ記錄ニ屬スルモノナリ、

蒐集書目

- 古事記
- 日本書紀
- 續日本紀
- 日本後紀
- 續日本後紀
- 文德實錄
- 三代實錄
- 類聚國史
- 古語拾遺
- 本朝世紀
- 日本紀略

百練抄

扶桑略記

歷代編年集成一名帝王編年記

一代要記

歷代皇紀

大鏡

增鏡

續世繼一名今鏡

今昔物語

古今著聞集

吾妻鏡

源平盛衰記

平治物語

吉野拾遺

大日本史附神祇志

續史愚抄

小右記一名野府記

法成寺攝政記一名道長公記

水左記

爲房卿記一名大府記又大記

中右記

長秋記

殿曆一名知足院關白記

台記

台記別記

兵範記一名人車記

山槐記

顯廣王記

玉葉一名玉海

吉記

仲資王記

明月記

三長記

平戸記

岡屋關白記

仁部記一名資宣卿記

勘仲記一名兼仲卿記

親長卿記

康富記

薩戒記

建内記一名建聖院内府記

資益王記

忠富王記

伯家部類

宣順卿記

方長卿記

季連宿禰記

後中内記

桂宮日記

賴言卿記

兼胤公記一名八槐御記

知音卿記

柳原紀光卿記

言成卿記

延喜式

類聚符宣抄一名左丞抄

壬生家古文書

彌家文書

新抄格勅符抄

西宮記

江家次第

師元年中行事

年中行事抄

年中行事祕抄

世諺問答

日次紀事

年中重寶記

滑稽雜談

諸國年中行事大成

二十二社注式

二十一社記

二十二社本緣

大和豐秋津嶋卜定記

藤森社緣起

諸社根元記

諸神記

神名帳頭注

神祇正宗

神祇拾遺

神社啓蒙

本朝諸社一覽

神名帳考證

延喜神名式比保古

神名帳考證土代

驗の杉

稻荷神社考

神社聚錄

官社祭神考證

神祇志料

官社祭神記

山城國風土記

山城名所記一名洛陽名所集

山城名所寺社物語

雍州府志

菟藝泥赴

國花萬葉記

山域名勝志

山州名跡志

山城志

京羽二重大全

花洛名勝圖會

平安通志

古風土記逸文考證

公卿補任

太政官日誌

宣秀卿御教書案
 京都御役所向大概覺書
 延寶檢地帳
 古事記傳
 古史傳
 蜻蛉日記
 更科日記
 枕草紙
 枕草紙春曙抄
 後拾遺和歌集
 詞花和歌集
 千載和歌集
 續古今和歌集

夫木和歌抄
 新撰六帖
 堀河百首
 承久四年百首
 紀貫之家集
 源順集
 忠見集
 拾玉集
 散木弄歌集
 八雲御抄
 袋草子
 朝野群載
 雲州消息

伊呂波字類抄

拾芥抄

濫觴抄

和漢三才圖會

秦山集

安齋隨筆後編

玉禱

出定笑語附錄

元亨釋書

東寺記

長曆

皇和通書

稻荷神社古文書

稻荷社事實考證記

稻荷社古今事實考證

便蒙祕記

舊神官日記

舊神官月番雜記

稻荷神社記錄

羽倉文書

竈家中行事

荷田東丸日供再興記

官幣大社稻荷神社明細圖書

稻荷神社由緒調書

社務所日記

目次及索引

祭神	七
鎮座	三十三頁
社地	五十一頁
社殿及諸建物	六十頁
旅所	百二十七頁
神階	百三十二頁
社格	百三十八頁
神領	百四十二頁
行幸行啓及御幸附皇族御參拜	百五十二頁
奉幣諸奉納	百六十五頁
祈請附神異	二百二十九頁

此日ヲ以テ鎮座ト爲スノ説蓋シ適當ナリト謂フ可シ、
 社地 社地ハ京都府山城國紀伊郡深草村大字福稻、稻荷山ノ麓ニ在リ、
 往古ハ稻荷山三ヶ峰ノ上ニ在リシニ、後花園天皇ノ永享十年正月五日、
 足利將軍義教之レヲ今ノ地ニ移セリト云フ、
 社殿 社殿ハ延喜八年贈太政大臣藤原時平始メテ三箇社ヲ修造セシ
 後、永享十年足利義教社地ヲ今ノ地ニ移セシ時、三ヶ峰ニ摸シテ三箇別
 殿ヲ造營シ、應仁二年兵燹ニ罹リテ燒亡シ、明應八年ノ再造ニ當リテ五
 社合殿ト爲レリト云フ、而シテ現今ノ諸社殿ハ天正十七年八月豊臣秀
 吉ノ造營セシ所ナリ、
 旅所 旅所ハ京都市下京區九條町ニ在リ、其起原詳ナラズト雖モ、往古
 ハ京師八條坊門猪熊、現今此邊ヲ右御旅所ト唱フ、及ヒ七條油小路ノ兩所ニ在リ、天正
 年間今ノ地ニ移レリト云、
 神階 神階ハ淳和天皇天長四年始メテ從五位下ヲ授ケラレ、爾後累進

シテ朱雀天皇天慶五年正一位ニ陞ラル、
 社格 社格ハ仁明天皇承和十年預名神例、醍醐天皇ノ朝廷喜式制定ニ
 及ンテ名神大社ニ列シ、中古以來二十二社ニ加リテ上七社ニ位シ、明治
 四年ニ至テ官幣大社ト爲レリ、
 神領 神領ハ清和天皇貞觀七年神田三段ヲ充テ奉ラレ、爾後累加シテ
 加賀山城兩國ニ散在セシニ、天正十七年ニ至テ、豊臣秀吉更ラニ稻荷近
 傍ニ於テ百六石ヲ奉納シ、徳川家康之ヲ繼テ累代朱印狀ヲ社司ニ授ク、
 而シテ現今ノ境内ハ無慮拾壹萬六千五百九拾三坪四合ナリ、
 行幸行啓及御幸 行幸ハ後三條天皇延久四年ヲ始メトシ、順徳天皇承
 久元年ニ止マリ、其後ノ記事諸書ニ見エズ、御幸ハ壽永二年、後白河上皇
 ニ始マリテ、弘長二年、後嵯峨、後深草二上皇ニ止マリ、明治九年十二月ニ
 至リテ、皇后宮ノ行啓アリ、
 奉幣 奉幣ハ文徳天皇仁壽二年ニ始マリ、以テ今ニ至ル、

祈請 祈請ハ朱雀天皇天慶元年ヲ始メトシ、明治三年ニ止マリ、其後ハ
 毎歲祈年祭ノ外、特ニ記スベキモノ無シ、
 祭禮 祭禮ハ往古勅祭ニシテ三月第二午日神與旅所ニ臨御シ、御祭又ハ神幸祭ト稱シ、俗ニ御出若クハ御波ト唱ス當日御輿迎フ儀アリ、四月上卯日還御ノ後祭典ヲ行ハル、之ヲ稻荷祭又ハ還幸祭ト稱ス而シテ中古ヨリ勅裁ノ繪旨ヲ神祇伯ニ下シテ祭典ヲ社司ニ任セラル、ノ例ト爲リ、爾來勅裁祭ト稱シテ神幸ノ途上繪旨ヲ鹵簿ノ中央ニ奉シ、威儀頗ル嚴正ナリ、應仁ノ亂後此ノ典儀久シク中絶シタリシニ、安永三年ニ至テ再興シ、祭器什物其他鹵簿ノ盛裝等壯觀却テ舊時ニ倍セリト云、明治六年祭政ノ改革ニ因テ繪旨ノ下賜ヲ廢シ、四月九日ヲ以テ例祭ト定メラレ、勅使參向シテ奉幣奠享ノ儀ヲ行ハレ、爾來神幸還幸ハ一社ノ私祭ニ屬シ、且ツ改曆ノ爲メニ神幸ヲ四月第二午日還幸ヲ五月上卯日ト變更セシモ、稻荷祭ノ名ハ依然トシテ存シ、式典鹵簿等舊時ニ異ナルコト無シ、又五基ノ神與ハ古來著名ノ美觀ニ

シテ全國無比ト稱シ、胴體及ヒ裝飾物ハ皆優等ニシテ、金具ノ彫鏤織物ノ綉彩等ハ概テ名工ノ作ニ成リ、總テ金色燦爛實ニ人目ヲ眩ス、而シテ一基ノ昇丁殆ンド三百人ヲ要スルヲ以テ、其構造裝飾ノ偉大ナルヲ知ルベシ、又五箇郷不動堂(田中社、東九條、上社、植小路、中堂寺、下社、西九條、中社、八條、四大神)ニ於テ各神與ノ昇丁ヲ擔當スルハ其由緣詳ナラズト雖モ、口碑ノ傳フル所ニ因レバ、應仁兵亂ノ際右等ノ郷民各々神與ヲ奉昇シテ其禍ヲ避ケタルノ緣故ナリト云フ、諸神事ノ中、大山詣ハ一ニ注連張神事ト稱シ、往古山上鎮座ノ時、毎年正月五日御膳ヶ谷ニ於テ神饌ヲ調供セリト云フノ古例ニ依リ、當日早旦、山上ノ各神蹟ニ注連繩ヲ張り、神職一同登山、御膳ヶ谷ニ於テ神酒清酒及濁醪ヲ土器ニ盛リテ之ヲ供シ、舊例、秦氏ハ耳土器ニ清酒、荷田氏ハ榊葉ニ中汲酒ヲ供セリ、各々拜禮畢テ直會ヲ開キ、而シテ皆頸ニ日蔭蔓ヲ懸ケテ當所ヲ出テ、途上劍石、南又杉枝ヲ冠ニ挿シテ各神蹟ヲ巡拜ス、此日庶人ノ登山拜觀スル者頗ル多ク、供酒ノ式終ルヲ待テ、廣集競争シテ撤供ノ土器ヲ拾得シ、其雜鬧實ニ

甚シ、蓋シ之ヲ得テ歸ルトキハ幸福多シト云フ、奉射祭ハ一ニ御弓始神
 事ト稱シ、起原詳ナラズト雖モ其式頗ル嚴肅ナリ、而シテ往古ハ正月十
 三日ナリシニ、舊神官概テ非藏人職ヲ兼テシヨリ、當日ハ宮中參賀及ヒ
 摺紳廻禮ノ定日ニシテ、神事執行ノ遲緩ヲ免レザルガ故ニ、便宜ニ依テ
 前日之ヲ行フノ例ヲ生ジ、因習久シキヲ經テ寶曆五年以後遂ニ自ラ變
 更シテ十二日執行ノ例ト爲リ、以テ今日ニ至レリ、
 初午詣 初午詣ハ、實ニ當社大神始メテ鎮座ノ日ニ因縁スルモノニシ
 テ、此日貴賤上下ノ參拜特ニ多キヲ以テ古來此名稱アリ、而シテ皆ニ當
 日ノミナラス、毎月午日ニハ其前宵ヨリ遠近ノ庶民群集參拜其躰ヲ絶
 タズ、驗ノ杉ハ特ニ初午詣ニ限ラザルモ、其緣故最モ深キユト古歌ニ徴
 シテ明ナリ、
 稻荷詣 稻荷詣ハ、例祭若クハ初午詣ノ外、平日特ニ參拜スルモノニ對
 シテ古來此名稱アリ、是レ神德ノ最モ顯著ナル所以ナラン歟、

舊神官 舊神官ハ、秦及ヒ荷田兩姓ノ世襲ニシテ、秦姓ハ十家、荷田姓ハ
 四家アリシガ、維新ノ後離散シテ今猶存スルモノ少シ、
 攝社及末社 攝社ハ、本社ニ配祀スルモノ、外、境内ニ一社、境外ニ一社
 アリ、末社ハ、境内ニ十二社、境外ニ二社アリ、
 山上ノ舊蹟 山上ノ舊蹟ハ、神蹟七所ノ外、古歌及ヒ諸書ニ載セタルモ
 ノ多シト雖モ、現今殆ンド煙滅ニ歸セルモノアリ、或ハ當山ノ城外ニ屬
 セルモノアリ、車坂及ヒ還坂ノ若キハ今東福寺ノ境内ニ屬ス、

○祭 神

二十二社註式

二十二社

稻荷社

延喜神祇式曰、山城國紀伊郡稻荷神三座、

下社、大宮女命伊弉册尊化神也

中社、稻倉魂命神播百谷神也、一名豊宇氣姬命、大和國廣瀨大明神、伊勢外宮同體神名、比咩大明神

上社、猿田彦命三千世界地主神是也

◎玉禰三

さて伊勢の外宮の餘にも、此大神豊宇氣を祭れる社は、國々に多かるが、中に山城、國紀伊郡に坐す稻荷神社三座並名神大とある御社も、古書どよに、宇迦之御魂命、猿田彦命、大宮賣命とありて、宇迦之御魂命を主と祭れり、

◎古史傳十二

稻荷神社は、注式に、下社は、大宮女命異本に大宮命、中社は、稻倉魂命、播百谷神也、一名、豊宇氣姬命、鐵胤云、谷は穀也、とあるは、よく事實に符ひて、後人のおしあてに思寄るまじき説なり、上社は、猿田彦命

◎官社祭神考證

稻荷神社三座

祭神、倉稻魂命、猿田彦命、大宮女命

◎官社祭神記上

稻荷神社

所祭神三座

倉稻魂命亦名、大宜都比賣神、亦名、保食神

蓋、猿田彦命也乎、

蓋、大宮女命也乎、

中社即本を倉稻魂神とせるは、諸書大概同じ、○上社、註式に猿田彦命とあり、また土祖神と云へる説もあり、今云、古史傳に、大土神の如くなるときは、いづれに論はれたり、其事、○下社、註式に大宮女命とあり、○下

◎平安通志三十一 神社

稻荷神社式内

上社、大宮能賣大神、中社、佐田彦大神、下社、宇迦之御魂大神ヲ祭ル

◎古事類苑 神祇部 二十三

按ズルニ、○中 此三座ハ或ハ倉稻魂命、大宮女命、猿田彦命トシ、或ハ倉稻魂神、素戔嗚尊、大市姫命トシ、其他異傳頗ル多シ、

延喜式神名帳頭註

山城紀伊郡

稻荷、本社、倉稻魂神也、此神素戔嗚鳥、女也、母、大山祇神、女、大市姫也、倉稻魂神、播、百穀神也、故名、稻荷、歟、伊弉諾、御女、此名有之、一座素戔嗚鳥、一座大市姫也、秘中之秘也、以上三座也、○山城名勝志、所載亦同

◎神祇拾遺

稻荷社本縁

本殿、宇賀御魂父大地主素戔嗚鳥母大山祇女大市姫又豐字氣傳有之

第二殿、素戔嗚鳥亦大祖神トモ云フ、

第三殿、大市姫亦大宮命婦トモ云フ、

已上祕祕中甚深事也、

◎稻荷神社考上

山城國風土記曰、稱伊奈利者、秦中家忌寸等遠祖伊呂俱、秦公積、稻梁有富裕、仍用餅爲的者、化成白鳥、飛翔居山峯、伊奈生子、遂爲社名、至其苗裔、悔先過而拔社之木、殖家祭之也、其木蘇者得殖、木枯者不福、神名帳頭註、諸神記、二十二社注式、諸社根元記等に、此文を引用たる、互に異同あり、今校正て其是に從へども、猶文字を誤るも脱るも有りぞか

さて此白鳥神は田穀を成幸給ふ宇迦之御魂神にて、食津物を齧忽に射戯れしを怒らせ給て、斯在奇異狀を示して、神靈の顯坐る

にこそあらめとして、御親神宇迦之御魂神の御父母は、須佐之男命大市姫なり、と共に三座の社を營建て齋祀イソキツれりしなるべし、略○下

◎花洛名勝圖會東山之部八

稻荷神社

本社五座、第一宇賀御魂神、第二素盞烏尊宇賀御魂神の御父なり、第三大市姫神宇賀御魂神の御母なり、

◎古事類苑神祇部二十三

稻荷神社

稻荷神社ハ、山城國紀伊郡深草村、稻荷山ノ麓ニアリテ、倉稻魂神、素盞鳴尊、大市姫命ヲ祀ル、○中世ニ此三座ヲ稻荷上中下社ト云フ、倉稻魂命ヲ中社トス、

諸社根元記

一稻荷

下社大宮命婦、田中社、中社大宮、四大神、上社客神十禪師、十禪師者、瓊杵尊坐也、神社啓蒙二

稻荷

下社、大山祇女非開耶姫、延喜式頭註

中社、倉稻魂同名異神有三神、而司職各異也、勿混

上社、土祖神延喜式頭註

○諸社一覽、日本風土記所載亦同

◎山州名跡志

稻荷宮

所祭三座

大山祇女、倉稻魂神、土祖神、已上

上古ニハ三座ノ神三所ニ別レテ、上社中社下社トイヘリ、所祭上

ハ土祖神、中ハ倉稻魂、下ハ大山祇女也、

◎ 國家萬葉記 一之下 諸神社

稻荷社、山城國帝城ヨリ東南二里又稻成、又飯成共書ス、

所祭神三座

大山祇女社下、木花開耶姫ニハ非ズトナリ又曰太田命

倉稻魂社中、同名異神

土祖神社上、又曰大宮姫ナリト、別本ニ由テ考ナリ、

今五座と稱するは、中の社を三座とす、

伊弉册尊、瓊瓊杵尊、倉稻魂、

延喜神名式比保古畿内山城二

稻荷神三社 並名神大 月次新嘗

兼永作稻荷神社三座也、起謂倉稻魂一座、是號下社、天御孫尊一座、是號中社、諸社根元記亦曰稻荷地神三代尊也、者是中社、御事也、伊弉册尊一座、是號上社、詳于秘訣卷也

◎ 菟藝泥赴四ノ上

稻荷社

上社、伊弉册尊云云、或説土祖神といふ、然れども彼社家不用之、

下社、倉稻魂是本社也、或は大市姫と申、雖然、彼社家には非也、

中社、瓊瓊杵尊或説是倉稻魂と申、彼社家不用之、

右彼社家松本氏の説にまかせて記する所也、

◎ 神社覈録

稻荷神社三座、並名神大、月次新嘗

祭神、倉稻魂命一座、社下天御孫尊一座、中社伊弉册尊一座、上社以上社家説、

伊呂波字類抄 諸社

稻荷

下宮田中 中宮命媛四大神黒鳥 上宮小薄

雍州府志 三神社

稻荷社

上社太田、命中社倉稻、魂、下社大宮姬也。是稱上中下者、非神位之崇卑、就社之所有、而稱上下者也。今所傳謂五座、而中社爲三座、所謂伊弉諾尊、瓊杵尊、倉稻魂也。三座之中有瓊瓊杵尊、在此社稱十禪師、宮、或號客人、宮、稻荷社事實考證記上

稻荷社御本宮并神號傳之事

御本宮三座

下社、若倉稻姬命

相殿

級長戸邊命

級長津彦命

中社、瓊瓊杵尊

上社、伊諾册尊

但口授十五箇條

右者從當社秦始皇祖伊呂具公所傳、而秦氏累代奧祕之爲傳來、○中他姓者勿論、雖同姓不其器、○勿傳焉、

神主從三位秦親盛

羽倉文書

稻荷社奧祕口傳

一本社相殿五座○二座略

上社今爲第三座、級長戸邊命也、異說大已貴命

下社今爲第一座、倉稻魂命也、異說保食神

上社今爲第三座、級長津彦命也、異說稚產靈神

客神、伊弉册尊、十禪師、天津彦火瓊瓊杵尊

右二神合祭於下社

倭訓栞前編三伊

いなり、神代紀に保食神の腹中生稻と見ゆて、稻生の義なり、稻荷と

書に据ばるとはいなにといひし成べし樺井を古事記に苅羽井と見
ぬたるがごとし一説に此山の地主の神を荷田の神といふ後に倉稻
魂を祭れりとも云へり、

秦山集雜著甲乙錄二

稻荷稻成之訓五穀之神也君臣上下不可不祭也、

二十二社註式

或記曰人皇五十二代嵯峨天皇弘仁十二年夏智證大師參能野以顯密
法還向之時過紀伊國石田川下稻羽里之間一人老翁多刈稻荷之二人
女亦戴稻不知行方失訖其夜大師夢一人老翁者上官二人女下中社云
云今案稻荷社者秦氏遠祖也云云、

◎玉釋三

さて伊勢の外宮の餘にも此大神豐宇氣を祭れる社は國國に
多かるが中に山城國紀伊郡に坐す稻荷神社三座並名神大とあ
月次新嘗

る御社も古書どもに宇迦之御魂命猿田彦命大宮賣命とありて、
宇迦之御魂命を主と祭れり、略中さて今世國國に稻荷神として小
祠の多かるに就て説あり然るは豐宇氣神を御食都神とも申す
故に古書どもに三狐神とも書たるを世人心得ひがめて稻荷社
に坐す三座の中なる大宮賣命は天照大御神の御前に侍ひて事
執り給ひし神なる故に專女と申せるなどを混じて稻荷神を狐
なりと言ひ狐に專女と云ふ名を負せ稻荷と云名をも付て狐を
祀れる祠をば今は推なべて稻荷祠といふ事とは成りぬ、上方邊
の田舎
にては多く狐を專女と稱し東國邊にては多くとうかどぞ云なる然
ればかく言ひ來れるもいと古き事とは聞たり其は京の稻荷山の
末社に白狐社といふありて專女神とも稱ふにて知るべし但しかく
云ひ來れるも古き事なる故に今は狐も稻荷神の氣をりにて人に託
して吾は何處の稻荷ぞなき云ひ或は吾を稻抑此興りは眞言法師
荷に祭り給へなきと云ふは笑しき事なり、
の妄誕より出たりと思はる其は古く空海ほうし渡唐せる時に、
白狐の老人に化たるが遇りそれ空海の弘むる佛法を守らむと

約せざるを歸朝して後に、東寺の門前にて彼、老人稻を荷ひて逢りしかば、東寺の鎮守に祭りて、稻を荷へる謂を以て稻荷明神と號たれど、實は本地十一面觀音にて在りしと言ふ俗説あり、此説鎌倉前後の書等に彼此見えて、神社考、神社啓蒙などにも擧て其妄を論じ、井澤長秀が俗説辨といふ物にも其辨あり、二十二社註式には、智證大師過紀伊、國石田、川下稻羽里之間、一人老翁刈稻荷之、二人女亦戴稻云云とて、圓珍が事を爲たり、其もこれも妄誕なること云ふも更なり、また其眞言宗にて稻荷は荼耆尼天なりと云ふ、其やがて妖狐の梵語と聞いたり、抑かゝる妄誕どもの世に弘まれる事は、世間こぞりて佛法に心酔して、神の故實を採ぬる事の癡略なる虚心を見すまして、狐と僧とは妙に人を誑かす能あれば、然は欺けるなり、法師と云ふ物は、とかく尊き御徳の神等をば己が道へ引込みて、佛の利益に奪ふ物なり、油斷すべからず、德永茂彦云く、今世遇に、ば、僧等勸めて、陀耆尼法を修せしむれど、此は外法なり、其は源平盛衰記に、清盛若くて餘なる貧者なりしに、或時連盛野にて大なる狐を追

出し、既に射むとせるに狐忽に黃女に變じて、我命を助けば、其所望を叶へむと云にぞ、清盛さては貴狐天にて御座すにやと、馬を下て敬屈すれば、女また本の狐と成りて、失ぬ、清盛按じて、偕は我陀天法を成就すべき者にこそとて、彼法を行ひけるが、實や外法成就の者は、子孫に傳へずと云ふを、如何すべきと思はれしが、善善今の如く貧ならむよりは、一時に富て名を揚むにはとて、行けると有をも思ふべし、醫書に邪の至る所、その氣必ず虚すと云ふは、然る言にて、法師らの然る外法を弘むるも、世人の本を辨へざる虚を見て物する態なる故に、師は油斷すべからずと誡められたり、○中略 然れば、山城の稻荷は更なり、所所に移し祀れる、稻荷神と申すをも、隨分に慇懃に仕奉るべし、其は稻荷といへば、狐を祀れる祠とのみ江戸人などは思へど、○中略 其主神は上に説明せる大神等なり、

◎ 險の杉

二十二社註式に或記曰、弘仁十二年夏智證智證と書るは弘法の誤大師參熊野、以顯密法、又奉飾三所威光、此三所とは熊野三還向之時過紀伊、國石田河下稻羽里之間、一人老翁多刈稻荷之、二人女亦戴

稻云云、略○中これも上件○二十一社記と鑑と同じ事にて、空海が事なるを智證としも書るは違へり、智證が傳を考ふるに、弘仁五年の生にて其十二年はわづかに八歳なれば、年頃も合はず、もとはたゞ大師と書るを、智證が門徒などのさがしらにかれが名を書加たるものなるべし、公事根源稻荷祭の條に、一説を擧て、弘法大ひ給ひけるを、東寺の鎮守に勸請されたりと申説も侍るなり、さかいていなりとは、稻荷と書たるとかやと記されたるも同説なり、さかくて、上件に擧たる諸説どもの趣も、とより空海が偽妄説をもてかまへたる所爲なる事は、論ふまでもあらねど、然ものしたりける事は實にて、其門徒等の書きも傳へ、語りもつたへ來れる趣なるを、世々を経るほどにとりくゝに乖離もいてき、また後の有さまに合へて、さおしら説そへたりとときこゆることも交れるを、いまその諸説を併せて推考、とりすべて云はむには、弘仁十四年に空海東寺を賜りたるに倣ひて、はやくより三ヶ峯に祭れる伊奈利、

神を、我寺の鎮守にせむと巧みて、稻を荷ひ杉、葉持たる老夫老嫗の子を連れ來れるに逢て云云と約りたるが、則伊奈利神なりと稱ふ云云、

倉稻魂神

日本書紀一

一書曰、伊弉諾尊與伊弉册尊共生大八洲國、然後略○中又飢時生兒號倉稻魂命、

古事記上

故是以其速須佐之男命、宮可造作之地、求出雲國、○中又娶大山津見神之女名神大市比賣、生子大年神次、宇迦之御魂神、二字以音

◎古事記傳九

宇迦之御魂神、宇迦は上に云るとく食なり、書紀に伊弉諾尊又飢時生兒號倉稻魂命、倉稻魂此云宇介能美拖磨、大殿祭祝祠に、屋船豐宇氣姬命、是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻とある、此等は此記に

豊宇氣毘賣神とありしにあたりて、此なる神とは別なるを御名の同きは、功德の等き故ぞ、彼は食の元始の靈、此は其食の事に功座し神なり、御魂とは、恩頼、又萬葉五に、阿我農斯能美多麻多麻比豆などある意にて、其功德を稱へたる名あり、

◎古史傳四

宇迦之御魂神、御紀に倉稻魂命と書て、此云、宇介能美拖磨とあり、今は古事記に依れり、師云、宇氣を轉じて宇迦と云なり、如此れば、氣、宇氣、宇迦、みな同言にて、右の御名、いづれも此食の意なり、御魂とは、恩頼、また萬葉五に、あがぬしの美多麻たまひて、などある意にて、其功德を稱たる名なり。と云れき、また内宮儀式帳、葭原神社の下に、宇加乃御玉御祖命ともあり、さて式に、山城國紀伊郡に稻荷神社三座、並名神大、月次新嘗とあるは、此神を祭れる御社なり、其は二社注式に、稻荷社、倉稻魂命、一名豊宇氣姫命、大和國廣瀨、伊勢、外宮同體、

日本書紀二

元明天皇、和銅四年、始顯坐伊奈利山、三峯とあり、

因勅皇孫曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣、實祚之隆、當與天壤無窮者矣、已而且降之間、先驅者還白、有一神居天八達之衢、其鼻長七咫、背長七尺餘、當言七尋、且口尻明耀、眼如八咫鏡而赧然似赤酸醬也、即遣從神往問、時有八十萬神、皆不得目勝相問、故特勅天鈿女曰、汝是目勝於人者、宜往問之、天鈿女乃露其胸乳、抑裳帶於臍下而笑、嚙向立、是時衢神問曰、天鈿女、汝爲之何故耶、對曰、天照大神之子所幸道路、有如此居之者、誰也、敢問之、衢神對曰、聞天照大神之子、今當降行、故奉迎相待、吾名是猿田彦大神、時天鈿女復問曰、汝將先我行乎、抑我先汝行乎、對曰、我先啓行、天鈿女復問曰、汝何處到耶、皇孫何處到耶、對曰、天神之子則當到、筑紫日向高千穗樵觸之峯、吾則應到伊勢之狹、長田五十鈴川上、因曰、發顯我者汝也、故汝可以送我而致之矣、天鈿女還

詣報狀皇孫於是脫離天磐座、排分天八重雲、稜威道別道別而天降之也、果如先期皇孫則到筑紫日向高千穂、穗觸之峯、其猿田彦神者、則到伊勢之狹長田五十鈴川上、即天鈿女命隨猿田彦神所乞、遂以侍送焉、

古事記上

爾日子番能邇邇藝命將天降之時、居天之八衢而、上光高原、下光葦原、中國之神於是、有故爾天照大御神、高木神之命、以詔天宇、受賣神、汝者雖有手弱女人、與伊牟迦布神、自伊至面勝神、故專汝往將問者、吾御子爲天降之、誰如此而居、故問賜之時、答曰、僕者、國神、名、猿田毘古神也、所以出居者、聞天神御子天降、坐故、仕奉御前而、參向之侍、

◎古事記傳十五

猿田毘古神、名、義、書紀に口尻明耀云云とあると、カミ上天高原云云とあるとを以、思ふに、尻明光彦なり、志理の理を畧く、例は備中郡名後月などあり、又阿を畧くは常なり、かくて志加流を畧めて佐流とて、獸の猿は、此神の形に似と云に同じ、又豆良を約れば多なり、

たる故の名なるべし、

◎古史傳二十

猿田毘古、大神、猿田は佐田と訓べし、猿を古は佐とのみも云りし、故に借て書りと見ゆ、其は和名抄に、下總國の郡名に、猿嶋、佐之萬とあり、神名式に、參河、國賀、茂郡、狹投、神社を、同國、本國、帳に、坐加茂郡、正一位、猿投大明神と見ゆ、然れば古々猿を佐とも云ふこと炳し、故借て書るならむ、然るを古くも、猿、字の借字なることを思はざりしと聞て、神代紀、下に、此神の容貌を、口尻明耀云云と、猿の状に見ゆべく書れしは、甚じき非なること、既に辨たるが如し、さて此神やがて、佐太大神なる由は、たゞ比古てふ言の有無のみ、の違にて、全く同じ御名なり、其は出雲風土記に、三所に、佐太大神と記し、神代紀に、猿田彦、大神とみづから名告まし、古事記にも、皇美麻、命の御詔に、猿田毘古、大神と詔はり、然れば此は、尋常に大神と

申すとは異りて、刺國大神などの類に、もとより大神と申べき由ありて、負賜ひけむ、是同神なるべき一證なり、○さて此、大土神やがて、猿田毘古、大神なる由は、伊勢國度會郡宇治山田の地主、神と稱して祭れるに、猿田毘古、神後に天照大御神を、伊勢の狹長田伊須受之川上に到坐むと云ひて、御自は、伊勢國に鎮坐るに符ひ、はた其御孫大田、命と云を、宇治、土公氏といひ、此、命垂仁天皇の御世に、天照大御神を、伊勢國宇治地に待受奉れるなどを、合せ考へて知らる、○中斯、て其御父神は、大歲、神なり、其は大土、御祖、神猿田毘古、神、亦云、佐同神なること、上にも下にも注如くにて、大土、御祖、神は、大歲、神の御子なること既に見たる如くなればなり、

大宮能賣神

古語拾遺

于時天照大神中心獨謂、比吾幽居天下、悉闇群神何由、如此歌樂、聊開戸而窺之、爰令天手力雄神引啓其扉、遷座新殿、則天兒屋、命太玉、命以日御

綱今斯利久迷繩、廻懸其殿、令大宮賣神侍於御前、是太玉命久志備所生神如今世內侍善言美

詞和君臣問、令宸襟悅釋也、豐磐間戸、命、櫛磐間戸、命、二神守衛殿門、是並太玉命之子也、當此之

時上天初晴、衆俱相見面皆明白、伸手歌舞相與、稱曰、阿波禮、言天晴也、阿那於

茂志呂、古語事之甚切皆稱、阿那多能志、謂之手而舞、今指樂事、阿那佐夜憩

竹、葉之聲也、飯憩、木名也、振其聲也、爾乃二神俱請曰、勿復還幸、

◎古史傳十二

さて内侍の仕奉る状は、如此にて、其は大宮能賣命の、此時然して大御神の御心をとり奉れるに、ならひ因ることなり、其證は、此神に申す祝詞に、大宮賣命、登御名乎、申事、波皇御孫命、乃同殿、能裏爾塞坐、氏參入罷出人、能選、比所知、志神等、能伊須呂許比阿禮、比坐乎、言直、志和、志、古語云、坐、氏皇御孫命朝、乃御膳夕、乃御膳供奉、比禮懸伴緒手、繼懸伴緒手、躡足躡、古語云、不令爲、氏親王諸王諸臣百官人等、乎已乖乖不令在邪意穢心無、久宮進進、米宮勤勤、氏米谷過在

乎見直志聞直坐氏平良氣安良氣令仕奉坐爾依氏大宮賣命止御
 名乎稱辭竟奉登久白とあり是にて御名の義も御功のことも知ら
 れたりかく君と臣との御間取持ち侍たまふ徳の卓れて大に坐
 が故に神祇官の八柱の神の連にも祭られ給ひ但し此八神の中
へる事は後に加へたるにて其は貞また朝廷に仕奉る官人等は更
觀なきよりは後なるべく思たりにも云はず古くは末々の人まで祭をなして其御幸ひを祈白せ
 ることになむ有ける其は兵範記に保元三年正月九日殿下宮畔
 祭如例右大臣殿御方初有此儀云云家令大舍人允紀宗頼爲祝師
 と見ゆ○中さて此神を祭れる社は神祇官の八神殿の外にも神
 名式に造酒司坐大宮賣神社四座並大月文徳天皇紀齊衡三年九
 月造酒司酒麴神此は宇迦之御魂神の靈代なり其は酒殿神の神從
體を根倉ミカと云よし本記に有にて知るべし從
 五位下大邑刀自小邑刀自等竝預春秋祭と有りこれに依れば酒
麴神大邑刀自小邑刀自と申にやさて大宮賣命の造酒司に祭られ給
ふことは大御心を悦しめ仕奉人たちの手蹟足蹟なきあらせず侍は

しめ給ふ御功に依また式に丹後國丹波郡大宮賣神社二座名神
 ることなるべし
 貞觀元年正月丹後國從五位下大宮賣神從五位上と國史に見ゆ
 また式に武藏國埼玉郡に宮目神社などありまた稻荷神社は注
 式に下社大宮女命異本に大宮命婦中社倉稻魂命播百谷神也
一名豐字上社猿田彦命とあるはよく事實に符ひて後人のおし
 あてに思寄るまじき説なり扱また笠間と云名にて祭れるは式
 に越前國坂井郡に笠間神社加賀國石川郡に笠間神社大和國宇
 陀郡に笠間櫻賣神社などありさて此神はかく太じき有功の神
 なるを記紀共に傳洩したり然るを拾遺に其事蹟を傳たるはこ
 よなき賜物なりけり然るは下に擧るが如く是太玉命久志備所
 生之神と有て大宮能賣命は案に常に殊なる功德ある神なる故
 に其生坐る時に久志備なる祥有しなるべし○中然れば大宮能
 賣命と稱すは萬幡豐秋津比賣命又云萬幡千の大御神の御前に

侍ひて、宮内の事取もち給へる功を稱たる亦名にて、やがて天宇
 受賣命にぞ有ける、其はまづ上に記せる大宮賣命の事蹟を、よく
 讀み熟思ふべし、決めて宇受賣命なるべき事狀にて、拾遺の傳の
 つゞきを思ふに、天鈿女命、其神強悍猛固故以爲名以眞辟葛爲鬘、以羅葛爲
 手繼云云、令天手力雄神引啓其扉、遷座新殿則云云、令大宮賣神侍
 於御前、如今世内侍善言美詞和君臣問令宸襟悅懽也豐磐間戸命、櫛磐間戸命二神守衛
 殿門とあり、此文豐磐間戸、櫛磐間戸命と申せるは、石戸別命の亦
 名なることを、心に留おきて見る時は、是やがて手力雄命なるべ
 く思得られ、其事情に思ひ合せて、大宮賣命、やがて宇受賣命なる
 べしとばかりは、誰も思得つべき趣なりかし、然のみならず大宮
 賣命の事蹟の、悉く宇受賣命めきたる、また宇受賣命は、然ばかり
 太じき神なるに、其を祭れる社としては、一だに有ことなくて、必此
 神を祭るべき祭事に、大宮賣命を祭れるなどを以て曉べし、なほ

言は、書紀に、素盞鳴尊の既に高天原を逐はれて後に復上り給
 ふ處に、天鈿女見之而告言於日神と見えたる事蹟を、此に令大宮
 賣神侍於御前とある事蹟、また此神に白す祝詞に、同殿能裏爾塞
 坐氏、參入罷出人能選比所知志と云るなどに思ひ合せて、御前に
 侍ひ塞りて、參入罷出る人の選を掌することは、必強悍猛固なる
 宇受賣命ならては、得勤むまじき事を辨へ、宮賣、宇受賣同神なる
 事を思ひ決む可し、

○鎮座

二十二社註式

稻荷社

人皇四十三代、元明天皇和銅四年、辛亥始顯坐伊奈利山三箇峰平處、是秦
 氏祖中家等、拔木殖蘇也、秦氏人等爲禰宜祝、供仕春秋祭、依其靈驗有被

奉臨時御幣

山城國風土記云、稱伊奈利者、秦中家、忌寸等、遠祖伊侶具秦、公積稻梁、有富祐、○祐、諸社根元、仍用餅爲的者、注所引作乃、乃、化、成、白、鳥、頭、註、諸社根元、記、所、引、作、裕、仍用餅爲的者、○仍、神名帳頭、化、成、白、鳥、○鳥、神名帳頭、註、諸社根元、記、所、引、作、裕、引作鳥、飛、翔、居、山、降、子、○子、諸社根元、記、所、引、作、乃、生、○子、生、神名帳頭、註、諸社根元、記、所、引、作、乃、遂爲社名、至、其、苗、裔、每、先、遇、○每、先、遇、神名帳頭、註、諸社根元、記、所、引、作、乃、而、拔、社、之、木、殖、家、禱、祭、之、其、木、蘇、者、得、殖、○殖、諸社根元、記、所、引、作、乃、木、枯、者、不、移、○移、諸社根元、記、所、引、作、乃、

◎ 驗の杉

稻荷神考證

山城國風土記、此風土記はもとより脱簡本なるを寫せる由、永祿元年十二月三日、熊野山僧良快の奥書あり、此は左丞抄、朝野群載なとに載たる、延長三年に、太政官符もて諸國司に仰せて召されたる、そのかみ、在來、し、風土記には、わらで、其頃更に撰びたる書と見えたるが、古書ともにも、此風土記の文を引載たり、とは此下に、注すがごとく、さて風土記の事は、とりすべて論へる書あり、云、紀伊郡伊奈利社、稱伊奈利者、秦中家、忌寸、遠祖伊侶具秦、公積稻梁、有、富裕、仍用餅爲的者、化而成、白鳥、飛、翔、居、山、降、伊、爾、奈、利、生、遂爲社

名、至、其、苗、裔、悔、先、過、而、拔、社、之、木、殖、家、禱、祭、之、今、殖、其、木、蘇、者、得、福、殖、其、木、枯、者、不、福、

○中 伊爾奈利生として、この伊爾奈利生の五字、諸本伊奈利山の四子と書り、又二十二社註式のト部兼俱卿自筆本には、子生の二字も、し、一本には伊奈利の三字とす、かくまら、に書て、いづれにても、其義きこえがたし、これか、れ、も、誤脱をか、さ、ね、た、る、も、の、な、り、然、る、に、諸、社、記、に、此、風、土、記、の、文、を、假、字、に、轉、じ、て、イ、ナ、リ、生、と、書、き、一、本、に、は、イ、チ、ナ、リ、生、と、書、り、こ、の、一、本、な、る、を、正、し、か、る、べ、き、上、に、擧、た、る、書、ど、も、の、書、さ、ま、を、併、せ、て、考、る、に、本、書、に、は、伊、爾、奈、利、生、と、書、る、を、と、り、に、誤、り、訂、正、し、て、書、り、も、稻、に、穂、の、結、て、生、た、る、趣、な、り、さ、て、化、而、成、白、鳥、と、あ、る、よ、り、こ、ま、て、は、神、の、御、所、爲、な、り、伊、侶、具、が、稻、梁、を、積、た、る、富、裕、に、心、驕、奢、り、て、餅、を、も、て、的、と、せ、る、を、警、戒、め、給、ふ、と、し、て、○中 稻實を結生して示、給へるなるべし、遂爲社名とは、伊、侶、具、こ、の、神、咎、を、畏、み、過、を、悔、て、遂、に、其、地、に、其、神、の、社、を、造、營、て、祭、奉、り、そ、の、靈、驗、を、稱、へ、て、稻、生、と、云、ふ、言、を、も、て、神、社、の、名、と、爲、る、由、な、り、イ、チ、の、子、を、省、て、イ、ナ、リ、ト、云、る、な、り、

◎古風土記逸文考證一

山城風土記云、南鳥部里、稱鳥部者、秦公伊侶具的餅化鳥飛去居、其所森云、鳥部河海鈔、空蟬卷

此風土記の文は、上に擧たる脱簡本には見えざれど、文脈を按るに、決く同記の文なり、讀合せて知るべし、略○中鳥部里云云、伊奈利社の祭の文に相合ひてかくれたる事なし、但しかの白鳥の飛騰居山、降伊爾奈利生とある後に、此所の森に飛去、來て居れりしなるべし、鳥部里は、和名抄に、山城國愛宕郡の郷に、鳥部止利倍、東寺に藏る長保四年の文書に、鳥部四至、限西、愛宕野、限北、公田と見たり、

◎玉禪三

此社の始めは山城風土記に、秦伊侶具と云ひし人、この地に稻梁を作りて、富裕たりし故に、祭りて社名と爲たりしよし見え、諸神

記に元明天皇和銅四年二月九日○九、恐誤倉稻魂命始現于伊奈利山、地主神、則荷田明神也、其地祀之、故號稻荷明神と有れば、伊奈利としも云は、稻梁の略語なるか、○下略

◎神祇志料六

稻荷神社三座、○中元明天皇和銅四年、秦中家忌寸等が遠祖、秦公伊侶具始て社を建つ、年中行事秘抄、諸社根元記、諸神記、四年、據二十二社註式、初伊侶具公稻梁を積て、富裕有り、仍餅を以て的とせらるに、化て白鳥に成て、飛翔りて三箇峰平處に居り、稻奈利生、其事甚靈異なるを以て、伊侶具私神として之を祭り、名て伊奈利社といふ、其裔孫秦忌寸中家に至て、伊侶具が過を悔て、社の木を拔て、家に殖て、此神を祈祭り、其靈驗に依て、朝廷より臨時の幣を奉り、其氏人等又禰宜祝として、此社に仕奉り、故今も其木を殖て、蘇ば福を得、其木を殖て、枯ぬれば福あらずといふ、山城風土記、參取年中行事秘抄、諸神記

年中行事祕抄

四月上卯日稻荷祭事

件神社立始祭始之由慥無所見、但彼社禰宜祝等申狀云、此神和銅年中始顯在伊奈利山三ヶ峰平處、是秦氏祖中家等拔木○拔木、詳書類從本作、拔來、今從天曆勘文、殖蘇也、即彼秦氏人等爲禰宜祝供給春秋祭等、依其靈驗、有被奉臨時御幣、○又見于年中行事抄

◎驗の杉

其伊奈利の社地、また其社建立たる時の事は、年中行事祕抄稻荷祭の下に、彼社禰宜祝等申狀云、此神和銅年中始顯在伊奈利山三ヶ峰平處と見えたり、平とは山上の平なる處をいふ、諸國の地名に其平某の平とてある平も、其平によれりときこゆ、さるは此山に峰三並べり中の一峰の頂の平處に、神の顯れ坐しけるを、やがて其處に社を建て祭始たる由にて、これ後にまた二峰に二座の

神を祭りて其を加へて稻荷神三座と稱し、但し三箇峰とは、三ッ云へるが文の調はさるが故に、ふとはきこえがたし、風土記にもよくよみあちはひて其峰を上中下と呼別ち、其社をも別ちては上社中、社下社と申し、其中峰の中社に當りて、三座の中の本神とぞきこえたまへり、○年中行事祕抄云、略、○中件社立始祭始之由慥無所見、但彼社禰宜祝等申狀云、此神和銅年中始顯在伊奈利山三ヶ峰平處云云、この祕抄の撰者、此に擧たる山城風土記をば見られざりしなるべし、件の文、大外記中原、師光、朝臣の年中行事抄に載たるも全同じ、諸神記には、たゞに元明天皇和銅年中云云と書出し、二十二社注式にも、人皇四十三代元明天皇和銅四年辛亥始顯坐伊奈利山三箇峰平處云云と書出して、下文はこの禰宜祝等の申狀と全同文なり、また諸神記に、別に天曆勘文云、秦氏人爲禰宜祝供仕春秋祭云云と記して、此申狀と同文なり、此記には諸説を

撰なく載たれば件の勘文といへるは、此申狀の事にて、其を他書に抄出して記せるまゝを採り載せたるものなるべし、然らば此申狀は、天曆に爾宜等が進れる勘文に乏ありける、さて此申狀には和銅年中とあるを、注式に四年辛亥と書るは、かの申狀の正本に依れるにか、又一説を書加へられたるにか、決めがたし、和漢合四年に係て稻荷神現と記せり、又卜部兼俱卿の神名帳頭註には、和銅四年辛亥二月十一日戊午始顯座伊奈利山三箇峰平處とあり、今推檢るにその年の二月に戌午はあらざ、十一日は丙戌なり、神祇拾遺にも同じ月日干支に係て云へる妄説あり、察ふに其は初午祭の起原にせむとて漫に日と干支を加へたる説なるべし、但し諸社根元記に此神の鎮座を和銅四年二月九日とあり九を七の寫誤とすれば七日は壬午なり、然らば件の帳の頭註に十一日戊午とある十一日は七日戊午の寫誤にて、實は二月七日壬午なりしによりて、其月の初午の例日となりしにもやあらむ祭るにせめての論ひなり。

諸社根元記

稻荷

元明天皇和銅年中始顯坐伊奈利山三箇峰平處是秦氏祖中家等拔木

神名帳頭註

殖蘇也、秦氏人等爲爾宜祝供仕春秋祭等依其靈驗有被奉臨時御幣

山城紀伊郡 稻荷 人皇四十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一

日戊午、○十一日戊午始顯座伊奈利山三ヶ峰平處

神祇正宗

人皇四十三代元明天皇和銅年中ニ始出現、○下略

神祇拾遺

上中下ノ三座ハ、元明帝和銅四年辛亥二月戊午○按長曆此月無日三降ニ出顯也

大和豊秋津嶋卜定記

平京波未深山乃時利既仁帝都乃勢自良備支波利誠仁日本乃中心國中乃秀天下無雙之勝地利奈南波晴禮北波塞利東波流水有天福壽延長之謂弘顯之西波長木山並比連禮四神相應弘爲寸然波四方四隅仁靈神

並御座天之代代乃固仁奈豆氣利略○中次仁辰巳乃方仁當天倉稻魂乃垂跡有利夫此神波百穀於播玉布故爾名介奉留神代乃昔利此降爾向伊玉母不知只三降仁顯玉和之人皇四十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡寸誠仁諸人哀憐乃御心深久蒼生乃作牟物波草乃片葉末百乃災於攘玉伊剩隨身乃寶於安久保事母皆此神態奈禮誰賀此神於疎久世牟

◎雍州府志三神社

稻荷社 社家說元明天皇和銅四年斯神始現于伊奈利山略○中昔者當社出現和銅四年二月九日○九恐也○下七誤

◎稻荷谷響記

社記云當社者元明天皇和銅四年二月壬午始顯坐于三箇峰平處上社中社下社三座是也秦中家忌寸等遠祖拔木殖蘇也仍其後胤相續而爲三箇社之禰宜祝供仕春秋祭

◎稻荷社古今事實考證

平塚瓢齋東山名所圖會編輯草稿一覽に越しける時稻荷社條下に加ふべく申遣しける

抑伊奈利と稱するは山城國風土記年中行事秘抄などにも見え、人もしる事なれど初て祭られし來由の正説は元明天皇の御宇、鴨御祖皇太神宮禰宜大山下鯨が末子鱗鴨氏舊譜に勅して和作伊呂俱銅四年二月七日此三ヶ峰に保食神を始め三柱神を稱へて祈年の祭を行ひ給ひしに秋を経て穀蠶共に豊饒なればその成功を褒給ひて長く祭の主と定め鴨氏を改め姓秦公と賜ふ○下

◎便蒙祕記

當社御本宮三座之事

傳記云元明天皇和銅三年詔曰頃年陰陽殊謬氣序違膏澤不降田圃損而五穀不登蠶織不成天下之百姓衣食乏矣遣使名山大川祭

神祀于時有神教而明年二月壬午使伊呂具祭三柱神於伊奈利山之三峰此年五穀大登蠶織成而天下之百姓得福矣

稻荷神社考上

稻荷社天曆勘文云和銅年中始顯坐伊奈利山三箇峰平處是秦氏祖中家等拔木殖蘇也○下

此勘文にては此神の顯れ坐るは和銅年中の事にて風土記の傳と異なるにやと見ゆれどよく思へば然にあらて神の始て顯坐るは上古秦公伊侶具が時にて和銅の時は御社を定造りて奉仕れる始なるべきを原文を略記すとして書備めつるなるべし○中其傳詳ならねども其初秦氏人の所領地に顯坐る神にて三座の御社をその地に營建て齋初奉れる故に漸後には其氏人等禰宜祝となりて仕來れりと云○下

二十二社本縁

稻荷事

此社乎常乃說爾弘法大師東寺仁住給留計時御弟子檜尾乃僧都實惠登云人彼乃寺乃南大門仁被計留徘徊老翁嫗乃異體奈留數多乃男子眷屬乎率志稻乎荷天遠里與休息留事乃體直也人登不見僧都成天奇思乃思於告大師申寸大師出給天招請志此人乎中門乃下仁物語志給里何乃所惠向給登尋禰申左連計比叡乃阿闍利師事也我等乎守護トテ招請奈利都留答波計連彼仁比叡神專鎮守天坐天當寺爾佛法乎守給登宣計禮承諾坐ス仍大師與此神同道有天勝地乎擇天今乃所爾鎮座云其東寺乃守護登成多摩也每年乃祭禮和東寺惠入給中門乃供御登寺家是乎供寸又太广我里登必供寸之大師乃時乃舊儀云初乃躰稻乎荷志給利與稻荷乃神號也云

◎神社啓蒙二

或問稻荷神社僧空海於東寺門前逢負稻老人海祭之以爲東寺鎮

守、以其擔稻故號稻荷云奈何、曰不知焉者以為然、知焉者不信、故子
舉其神名、使見之者不惑也、昔者神社多為浮屠見攘、竊還就浮屠覓
其說、令之為其傳、為其紀、胥率之陷于夷狄梵語之中、○中其號稻荷
者、所謂荷田神地置倉稻魂故也、

◎菟藝泥赴四

公事根源には弘法大師東寺の門前にて稻おひたる老翁にあひ
玉ひけるを、東寺の鎮守に勸請申されたり、さていなりとは、稻を
荷とかきたるにやとあり、是東寺の鎮守にいはひ申されたるゆ
へは、さも有べければ、彼かたにては此説を用ゆべし、此神垂跡の
はじめは、元明天皇の和銅年中なる事は、公事根源にも見えてあ
きらかなれば、稻荷の御名は弘法大師より以前なるべし、されば
稻をおひたる翁よりいなりの名はじまれとはいひがたかるべ
し、

◎諸社一覽

號ヲ稻荷ト申事 空海師東寺ノ傍シテ稻ヲ荷老人ニアヘリ是
神ナル事ヲ悟テ即祭納テ東寺之鎮守トス此故ニ今祭ノ日御旅
所ヨリ本宮ニ還リ玉フトキ神興ヲ東寺ニ成シ奉レバ東寺ノ堺
内ヨリ役當アリテ神供ヲソナヘ寺僧出テ眞言密乘ノ行ヲナシ
事オハレバ神興本山ニ還玉フ也是東寺ノ鎮守ナルユヘ也老人
ト化シ玉フ時稻ヲ荷ヘルニヨツテ此號有ト云云又卜部兼邦説
云稻荷之事一説弘法大師入唐之時御供被申共有和銅年中ニ稻
荷山ニ勸請也云云右兩説ハ兩部習合歟唯一神道説云當山之地
主神荷田明神ノ地ニ倉稻魂ヲ鎮座シ奉ル故ニ倉稻ノ稻ノ字ト
荷田ノ荷ノ字ヲ取テ號トス

◎稻荷神社考下

夫此神者本朝衣食祖神倉生安逸靈社也何人不敬云云○日本風
土記亦同

五社異傳

稻荷五社の縁故を後世に僧家に云傳ふる説あり其記籍どもを
 集めて通覽に悉皆此社の故事を後世より迎へて造れる偽妄な
 れば論に足はぬども寧樂朝より以來惶くも皇國の神を佛説の
 中に陥て悉く佛奴となしたる妄説に世人久しく惑されて其邪
 妄普く敷演來ぬればいみじき博達と云ども皇國の古學に意無
 きは此等の偽妄を深くも考正さずして口實とすめれば今此末
 に輯録て其妄言の採べくもあらぬ由を著すになむ○中稻荷大
 明神流記云弘仁七年孟夏之比大和尚斗蔽之時於紀州田邊宿遇
 異相老翁其長八尺計骨高筋太内含大權氣外示凡夫相見和尚快
 語曰吾在神道聖在威德也方今菩薩到此處弟子幸也和尙曰予有
 秘教紹隆之願神在佛法擁護之誓夫帝都坤角九條一坊有一大伽
 藍號東寺爲鎮護國家可興密教靈場也必奉待而已化人曰必參會

守和尚之法命同十四年正月十九日和尙忝賜東寺爲密教道場也
 同四月十三日彼紀州之化人來臨東寺南門荷稻提杉葉率兩女具
 二子矣歡喜備飯獻菓爾後暫寄宿二階柴守點東寺柚山定利生勝
 地此流記稻荷鎮座由來記の首に記て眞雅僧正の書る文と云り
 ○中 此餘東寺縁起眞言傳弘法大師傳 弘法大師行狀記廿一社記廿二
 社本縁公事根源埃囊抄等にいふ所各詳なるも略るもあれど總
 て此流記と同傳より出來たるものなり○中後世の識者は是等
 の旨趣をば考ずして稻荷神を東寺の鎮守に祭初たる神なりと
 のみ思へるは古學を忘果たる故なりけりさて又東寺にて稻荷
 神を鎮守の如く崇來れるも實に舊世よりの例なるは奈何なる
 故ぞと思ふに此神の東寺を造らるゝ初に崇あらせ給へるを空
 海の太く恐畏て此御社を崇奉りて東寺の守護神と御座べく祈
 奉れるより東寺の長者阿闍梨代々に惶み仕奉る例と成るにこ

そあるべけれ、さて神宮寺をも此山に造立しより、終に神官は寺家の權勢に壓れて、此神社の事勢一變れ、後に彼流記の如き説を新に構て、往古の事蹟を蔽ひて世に流傳しめしなべし、○下

◎出定笑語附録一

扱マタ僧トモハ、トカク尊クハヤル神ナバ我ガ方ヘ引入テ、物奪ンノ工夫ニスルユトヂヤ、其中ニ稻荷神ノ本地ハ十一面觀世音ヂヤナド、云テ、愚人原ナ欺クガ、ソノ云種ニ、昔弘法ガ赤縣ヨリ歸リガケニ、何所ヨリ來ルトモナク、同船シテ來ル白髮ノ老翁ガ有テ、夫ハ稻荷山ノ白狐デ、實ハ十一面觀音ノ化身デ有タガ、弘法ガ眞言宗ヲ弘ムル守神トナラウト約束シテ、其後ニ今ノ稻荷山ヘ、稻ヲ荷タル老人ニ化テ現ハレタル故、夫ヲ祭ツタノヂヤナド、シリモ結ラヌ大マンバナチ云ヒフラスガ、稻荷ノ大神ハ、ソノナタウイナイ物デハ无イ、○中殊ニ此御社ハ、元明天皇ノ和銅四

年ノ御鎮座ダカラ、空海ガ赤縣カラ歸リタル、大同元年ヨリ九十五年、前ノユトテム、嘘チ云ノハ僧ノ持前トハ云ヒナガラ、大抵ニスルガヨイ、○下

○按に、元亨釋書一卷、空海の傳に、釋空海世姓、佐伯氏、讚州多度郡人、父、田公、母、阿刀氏、夢、梵僧入懷、而有身、在胎十二月、寶龜五年生焉、とありて、當社鎮座は空海が生れしより六十三年前なり、

○社地

二十二社註式

稻荷社

人皇四十三代元明天皇和銅四年、辛始顯坐伊奈利山三箇峰平處、是秦氏祖中家等、拔木殖蘇也、秦氏人等爲禰宜祝、供仕春秋祭、依其靈驗有被奉臨時御幣、

藤森社縁起

弘仁七年大師、法弘稻荷大明神爲勸請藤森天王敷地之内、所望之由被達叡聞、被伺申當社神慮之處、可奉借之由、依有神託、三山之麓勸請之、自爾以來號彼所於稻荷矣、

◎雍州府志三神社

稻荷社、曾弘法大師於東寺門前逢荷稻老翁、其體不凡、大師以爲稻荷神之化現者也、則爲東寺鎮守、於茲移山上神社於今處、則號稻荷明神、稻荷或作稻成、或爲飯成、

◎日次紀事正月

初五日、稻荷社家御山參詣、在稻荷山上、稱三峰、是稻荷明神始垂跡之處也、土人或謂御壇、中世遷今社地、云云、

◎延喜神名式比保古二

稻荷神三座

起謂今社地、藤尾、鄉也、以舍人親王之神靈祭此地、號藤尾大明神也、弘法以稻荷三神遷此地、以藤尾神遷藤森、號藤森天皇弓兵政所、今藤尾、號稻

荷村、詳稻荷記錄也、

◎神名帳考證土代九ノ二

稻荷神社三座

今大和大路ノ南ニアリ、所謂伏見街道ナリ、伏見稻荷ト云フ、永享十年三、峯ヨリ遷スト云リ、

◎験の杉

今其諸説を併せて推考へ、とりすべて云はむには、弘仁十四年に空海東寺を賜はりたるによりて、比叡山の延暦寺に日吉神を鎮守とせらるに倣ひて、既くより三箇峰に祭れる伊奈利神を我寺の鎮守にせむと巧みて、稻を荷ひ杉葉持たる老夫老嫗の子を連れ來れるに逢て、云云と契約りたるが則伊奈利神なりといひ、さて三箇峰の麓にちかき藤尾の神社の地をもて、公家わたくしをこしらへて、峰上の三社を其地にうつしかの老夫老嫗、また其子を

三座に配當て、さて社號を伊奈利と稱すに、かの老人の稻を荷ひたりと説ひたるにことつけて、強ひて稻荷の字に叶へ書るを公さまにも用ひらるゝ事となり來れるなるべし略○下

◎花洛名勝圖會八山

稻荷神社 洛の東南伏見街道稻荷村にあり、俗に伏見の稻荷といふ、榎橋以南往還は伏見支配なりといへども、當社地は京尹に隸す

元明天皇和銅四年辛亥、三ヶ峰鎮座、永享十年依將軍義教公命移此所、

◎神祇志料六

稻荷神社三座、昔伊奈利山三箇峰にあり、後に今の藤尾に移る、中略嵯峨天皇弘仁七年二月丙午、僧空海の請に依て神社を三峰の麓に移奉る、即今地是也、

◎平安通志三十一

稻荷神社 紀伊郡深草村大宇福稻ニアリ、中略往時伊奈利山三箇峰ニ齋祀ス、略○中嵯峨帝弘仁七年二月、僧空海ノ請ヲ以テ、神社ヲ三峰ノ麓藤尾ニ移ス、今ノ地即チ是ナリ、

◎洛陽名所集五

稻荷

此社は東福寺より八町南也、

◎神社啓蒙二

稻荷 稻荷社者、在山城國紀伊郡去王城東南許三里、

◎枕草子春曙抄八

いなりの上の社は、今の社の奥十八町ばかり山中也、今も氏人は、正月五日に参事あり、瀧などの跡も有、

◎菟藝泥赴四ノ上

古は此御社今の社地より十八町後の山中にあり、中略枕草子に、

二月午日、清少納言いなりへまうて、中の御社のほど苦しき由をかけるも、かく奥深き山路なればなるべし、かくまうづる人のくらしみ侍るゆゑに、中頃より大路近き所にうつし奉れりとぞ、

◎諸社一覽三

稻荷

紀伊郡 帝城之南二里、バカリニ有リ、

昔ハ今ノ宮地ヨリ十餘町山中ニ有リ、坂アリテ諸人參詣ノ便アシケレバ、今ノ地ニ引奉ルト也、舊宮ノ跡今猶アリ、

◎國花萬葉記一ノ下

稻荷社 帝城より東南二里、

昔は今の宮所十町ほど山中のかみに有しを、弘法大師神縁の事有て、山上より今の所にうつされけりとなり、社家との舊地を別して御山と稱し、毎年正月五日に各參禮すとなり、

◎山城名勝志 十六 紀伊郡

稻荷神社 坐東福寺南

◎山州名跡志 十二 紀伊郡

稻荷宮 在稻荷山、○中上古ニハ、三座ノ神三所ニ別レテ、上社中

社下社トイヘリ、○中件ノ地山上ニシテ、自乾巨卯辰間、三峰雙立、

上社頂上ニアリ、中社ヨリ凡二町、下ノ社、中ノ社ト隔ルユト二町餘ニアリ、

◎和漢三才圖會 七十二之本

稻荷社 在紀伊郡 異二里 之城之

◎山城志 六 紀伊郡

稻荷神社三座 昔在稻荷山三峰、今在竹葉山西北

◎稻荷神社考 下

此三社の趾、今の社の奥十八町許山中に在て、三社二町ばかりづ

相隔るとぞ、毎年正月五日、神官此地に詣て、注連を引亘すを恒例とすと云へり、また御前谷と云名の遺れる所も、社の前なりし故なり、

稻荷神社古文書

一 當所境内之事

東ハ上塚ノ東武藏野谷ヲ限也、北ハ比沙門谷ヲ限ル、南ハフル瀧谷ヲ限ル、則是ヲ醍醐道ト號ス、西ヘスグニトナル繩手也、基ノ木ノ繩手ト云也、深草トノサカイ也、西ハ油小路マデ也、北ハ古ハ田中社ヲ限ル、然ニ九條殿ノ御代ニ光明フシ○フシハ峯寺略書ナリ殿東福寺御建立ノ時、式地ヲカリ寺ヲ御タテアル、神領ノ目錄ニハ坪付在之、今ハ法性寺ノ南口ノ橋ヲ境ト號ス、既ニ東福寺五社ノ宮ノ内ヘ、カヘリ峠トテ今ニ在之、田中明神ヘノ通道也、是ヲカヘリ峠ト申ス也、於向後守 田中町ヨリ下三町ヲ當所ヘ可付也、九條殿光明峯寺殿ヘ借

申置故也、爲末代如斯、

明應七年九月十六日

御殿預荷田宿禰修理亮延秀花押

總目代出羽守荷田宿禰延憲花押

◎京都御役所向大概覺書五

山城國中御朱印神社之事

稻荷○中略

社地東西百八拾貳間半、南北百九拾壹間半、稻荷奥山境内西東七百間餘、南北五百五拾間餘

◎稻荷谷響記

口境内云社地 稱奥境内者、和銅四年大明神降臨御鎮座之三峰云、今奥山内之事也

境内東西百八十二間餘、南北百九十一間餘、東ハ當山境ヲ限リ、西ハ大和大路ヲ限リ、南ハ深草領ヲ限リ、北ハ東福寺ヲ限リテ也、但深草東福寺領等ノ堺ハ、谷川ヲ以テ堺トセリ、

○社殿及諸建物

二十二社註式

稻荷社

延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣_{平時}修造件三箇社者也、

諸社根元記

稻荷 延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣_{平時}修造始件三箇社者也、_略

_{神記亦同之}

年中行事祕抄四月

上卯日稻荷祭事

件神社立始祭始之由、_{慥無所見、但彼社禰宜祝等申狀云、此神和銅年始顯在伊奈利山三ヶ峰平處、是秦氏祖中家等拔木殖蘇也、即彼秦氏人等爲禰宜祝供給春秋祭等、依其靈驗有被奉臨時御幣、}

延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣修始件三个社者

吾妻鏡

文治三年_{初後鳥羽天皇}八月廿六日甲午、可令遠江守義定、修造稻荷社之由、爲

權黃門經房奉被仰下、所被募重任之功也、稻荷祇園兩社破壞之間、皆付

成功可被終修治之功、

文治六年二月十日甲子、義定申狀云、_{言上、○中略}

一造稻荷社造畢覆勘事

右上中下、社正殿爲宗之諸神、合期造畢、無事、令逐御遷宮候畢、自餘、舍屋等事、又以非_無其營、勤修行事、季遠懈緩之上、_{奸濫}仍雖相副、俊宗法師候云、六條殿門築垣事、云大內修造、彼此相累候之間、自然遲遲、更以不存忽諸之儀候、已於不足、材木分、悉_{交量}直米、令沙汰宛都鄙之間候畢、

件注文、同、以進覽候、此外材木檜皮并作料已下、雜雜用途米等任損也、

支度先運上已畢、以前條條言上如件、可然之様可有計、御沙汰候恐惶
謹言

二月十日

義定上

進上 中納言殿

百練抄十五
後嵯峨

寛元三年乙巳三月廿二日丁巳、稻荷社假殿遷宮日時定、并軒廊御卜也、
稻荷社事
熊野社事

同年十一月廿九日庚申、稻荷上社燒亡、

平戸記

寛元三年十一月卅日辛酉、傳聞一昨夜燒亡、稻荷社上社云云、皆以化煙
云云、神社回祿異他、無沙汰之旨如何、尤以不審云云、

歷代編年集成二十五

寛元三年十一月廿九日、今夜稻荷上社炎上、件社當時造營之間也、

百練抄十五
後嵯峨

寛元四年二月廿三日癸未、稻荷上下社御遷宮日時定也、權中納言公光
卿以下參入云云、

百練抄十六
後深草

寶治元年丁未正月廿六日庚辰、稻荷社正遷宮日時定也、二位中納言夏
教卿參之、

同年二月四日戊子、稻荷社遷宮也、丑刻云云、

増鏡七
北野の雪

文永も三年に成ぬ略○中又の年略○中大風ふきて、略○中いなりの中の宮
までも吹とこなひて、すべてきしかたゆくすえも、ためしありがたき
かぜなり

稻荷谷響記

扱當社下山ノ年紀未詳也、或記云、永享十年正月五日、依將軍義教公之

命、稻荷社ヲ自山上今ノ地ニ被遷云云、

稻荷社事實考證記

御殿又云本殿又本社又云下御殿

社司傳來記云、後花園院御宇永享十年正月五日、京都將軍義教公依御願下社三社ノ相殿、又中社上社、又田中四大神兩社合テ同所ニ五社造營遷座于今地、兼有御沙汰云云、

上御殿下中上社相殿又云與御殿又云命婦社

社司傳來記云、後花園院永享十年正月五日、京都將軍義教公依御願、下中上社三所奉遷座于山下、三所別殿摸三峰、傳云先下社今ノ上御殿三座相殿是也、次中社上社今ノ上御殿東雙峰、北中社、南上社、(北山)

稻荷谷響記

當社ハ應仁二年三月廿一日ノ兵火ニ、山上山下ノ神社社屋悉ク燒亡シテ、社司等神靈ヲ守護シ奉リ、隨緣離山、或ハ他國ニアリ、

稻荷社事實考證記

應仁二年三月廿一日、因兵火、神社燒亡、

又云、應仁二年三月廿一日、多賀豐後守高忠從者骨皮左衛門尉道源等、燒拂當社山上山下宮殿社屋、而爲陣營、下社神主公歲中社神主公常上社神主親爲正祝、親潔權禰宜經次、權祝公之等、中社祝、上社祝、奉守護神靈、避兵火而逃近里、此時社記神寶、權兵火燒亡者多矣、

稻荷谷響記

應仁二年冬十二月十五日以來、世上聊靜謐ナルニ及テ、社司等願本腹之牀也、依之漸ク權殿建立成畢テ、先ツ五座相殿ニ神靈ヲ奉安鎮、勸請シ奉ル、今ニ至ルマテ、如斯、則テ今ノ五座相殿ハ應仁ノ權殿也、

稻荷社事實考證記

應仁二年十二月、三所別殿假殿造畢、同月奉遷宮、又云、應仁二年冬造營假殿、不日而成畢、十二月十五日、悉奉安置神靈者

也、

資益王記

文明十四年閏七月廿二日、稻荷中神主來、中社先日大風ニテ顛倒、仍上御社へ奉移云云、

稻荷社事實考證記

明應八年十一月上下御殿造營成畢、同月廿三日遷宮也、

按此時造營依爲用脚不足、始而爲下中上社相殿、無念之儀也、

天正十六年秀吉公依御願上御殿造替、廻廊等再興、

同十七年八月造營成畢、正遷宮、

後中內記

元祿七年十月廿九日、稻荷社正遷宮日時定之事、右社尤雖可爲陣宣下、武家用脚不足、且官幣之事、同社中雖望申、是以同前也、今度造替之事、自武家沙汰之作料別也、各別ニ爲遷宮料貳百石用脚出所也、然此詮議、稻

荷傳奏□□此沙汰事也、町奉行急日時之事、申彼傳奏也、雖然漸々三十石許殘置也、仍用脚不足也、官幣是又五社分五十石也、傍以難叶、仍武家傳奏議奏相談、關白申合候其上以て、可及言上有僉議、關白然者、日時定之事、消息宣下、可然之由被申上所也、以言上之通被仰出也、貳百石之内ニ而、陣宣下、雖可事行事、彼傳奏云若輩、又社家彼奉行諸事示合也、望申事并日時定事等、皆成後畢、畢竟彼傳奏遲、僉議故也、樂人之事被申、是又如放生會行幸之體也、大社ニハ無之樂、供神供時各別之事也、十人可參之由關白被計申由也、今日日時定消息宣下、左中辨俊清奉也、參向之辨同人也、是又依無下行如此、地下所役人不參、彼社、是以用脚之故也、假殿於遷宮者被用風記、申文御殿重頂戴了、十一月二日、稻荷社正遷宮也、子細見廿九日、午斜參内、入夜退出了、

季連宿禰記

東山天皇元祿七年甲戌十一月四日戊辰今夜戌刻、稻荷社正遷宮也、藏

人右中辨俊清、小川坊城、被參向稻荷社云云、傳奏伯三位、白川雅同被向、社頭云云、天氣快晴珍重云云、

遷宮日時定以下之事、去月廿一日以後記之、去八月日、九日、歟、假

殿遷宮日時定宣下之事不及沙汰、正遷宮日時去一日書調、宣旨自右

中辨被付伯卿、川白自伯卿被渡社中者也、史以下參向無之、

公卿補任

元祿七年十一月四日、稻荷社正遷宮、右中辨俊清參向、

羽倉文書

元祿七年八月九日正遷宮式

假殿遷宮次第

一兼日修覆若宮、此爲假殿、

一前齋三日、

一勘文之日時某早旦、或前日

一以淨水洗假殿、內陣、外陣以白布拭之、修理職、神人等役之

次清祓、作法別式

次本殿假殿樓門、鳥居各左右柱、仁立榊、付四手、神人等役之

次本殿假殿之間處、處舉庭燎、衛、神人

次遷宮用具等令檢知之、入辛櫃置本殿之側、白丁二人昇之

次到刻限社司等參昇于本殿、着座作法如常、

次神人一老奉仕庭上之儀、

次本殿假殿路次之間敷簀薦、其上敷白布爲緣道、

次自本殿南柱迄假殿北柱引廻外幕、五色幕也幕串各付榊枝、

右神人修理職役之

次正官五人開內陣御戸、

次正官五人垂覆面指手袋入內陣、此時笏拍手令消庭燎

次正官五人奉御正體鎮座于假殿

遷宮御次第

前驅

散米一器

神人一老

神木二本右左

神人三老

太麻二本右左

神人四老

下社御正體

社務奉

御撫物

正禰宜奉

御太刀

正祝奉

中社御正體

中神主奉

御撫物

權禰宜奉

御太刀

權祝奉

御面

下禰宜奉

嶋命婦

中禰宜奉

上社御正體

上神主奉

御撫物

上禰宜奉

御太刀

中祝奉

田中社御正體

御殿預奉

御撫物

上祝奉

御太刀

田中祝奉

四太神御正體

目代奉

御撫物

權預奉

御太刀

權目代奉

五座之神寶等如本殿安置之神太麻等殿下左右仁立之、

次正官五人下内内陣御簾、此時笏拍手、令明庭燎處處火、

次撤幕筵道、

次社司等退下、

次奉幣

次遷宮祝詞

次神供此間於庭上神樂

次神供祝詞

次閉内外之御戸

次社司各退下

一愛染寺勤行

元祿七甲戌年

社務 松本信濃

中神主 大西備前

上神主 松本左近

御殿預 羽倉主膳

目代 羽倉玄蕃

中社祝秦公杓日記

文政二年十月十六日、今般就御修覆、如先例、若宮壘幣遷座于本殿之事、今晚戌刻、若宮壘幣遷納于本殿也、祝詞如左、

高天原爾神留坐寸、皇親神魯伎神魯美尊乎、以我皇御孫乃尊乃安國

止平久所知食、端穗國乃中乃稻荷山乃下津磐根爾宮柱太敷建、高天

原爾搏風高知天、奉仕留禮三柱大神、攝社御神、又社社爾齋祀留禮神等、天

乃御蔭日乃御蔭止隱之、奉仕里所乃殿社、幾歲乎經天破損荒朽流太

波乎奉總修理止、是以天今日乎始止之權殿乃內爾寬文十五年九月社

務高經奉納留禮若宮乃壘幣、元祿七年御修理乃任例天、此十月十六日

戌時乎夏日乃吉刻登大宮乃神座乃邊爾納居置武事乃狀乎告申止

今奉留御幣、神慮毛足志爾所聞食天、此修理爾預里奉仕留禮棟梁乎始

末乃諸丁仁至萬手躓足躓無久不量毛過犯事有武乎神直日大直日

爾見直之聞直之、守助賜天風雨水火能無災久總天事穩爾守幸賜倍

殊波爾國家無動久天下平久安久敷地乃人等無障無災、夜乃守日乃守

里護福給倍恐美恐美申寸

文政四辛巳年二月十四日乙未假遷宮日時定宣旨使參向次第如左

右大史行厚山口治部少輔乘輿副使宗岡行修青木左兵衛大尉同使部等

次沙汰人案内社務以下各衣冠單神人一三三四臈加勢一人等各淨

衣單衛士兩人衣紋帶劍各着于土屋有祓之儀

次社司昇殿揚御格子掛壁代無御戸開之儀卷簾一統拜儀

次社司下殿前庭左右分頭斜着座以東爲上神人立便宜所

次史副使使部等參向

次史以下參向立于中門依雨儀樓門下衛士中門外因雨儀樓門外左右着座

次社務昇殿着座

次禰宜出向中門內機門內史文書進于禰宜禰宜取之昇殿進于社務社

務披見供案上復座

次上祝田中祝昇殿取神祿下殿史祿上祝授之副使祿田中祝授之使

部祿職事授之此祿豫設御殿庇簾下

次史以下退出

次社司一統昇殿文書拜見之後一統拜儀奉送

次垂簾入御格子下殿退出

一宣旨左之通

左辨官下稻荷社

應任日時令勤行當社假殿遷宮日時定事

今月二十六日丁未時亥

右權大納言藤原朝臣家厚○花山院

宣奉勅宜任日時令勤行者社宜承知依宜行之

文政四年二月五日

大史小槻宿禰判奉

右少辨藤原朝臣判○柳原隆光

同月二十六日丁未當日假遷宮次第左之通

一亥刻社司已下着土屋修祓、
 次社頭辨備之由告于執奏卿、
 次執奏卿着舞殿給、
 次社司昇殿着簀子座、
 次奉迎開御戸警蹕、一統平伏捲簾、
 次日代上祝權目代下殿參于假殿、
 次捲簾設掌燈、
 次日代正祝權目代復參于本殿、
 次一統拜儀、白告可奉遷假殿之由、
 次三神主御殿預目代參于假殿、
 次神人二臈敷蒞道布單、
 次禰宜令爲神人消掌燈、假殿已下應之、
 次有渡御、御先神人執齋木發聲、衛士執白枝前行、先田中社、次上社、次下社、次中社、次四大神等、五座皆同、此時執奏卿下殿着軾、令平伏給由也、

次供掌燈、庭上應之、
 次下神主以下一統假殿軒下一列立、
 次悉奉爲遷宮之由告于執奏卿、卿令退給、
 次社務奉幣、權目代役送、一統拜儀祝詞訖、禰宜供御幣于中央、
 次一統昇殿、
 次供神饌、
 次拜儀祝辭、
 次庭上奏神樂、畢撤神饌、
 次奉送閉御戸警蹕、一統平伏垂簾、
 次下殿、
 次參向于上御殿、
 次退出、巳刻前、
 文政五年十一月十日、正遷宮次第左之通、

一午刻比、伯侍從雅壽王御參向也、令入休幕暫時而奉行廣橋頭辨光成朝臣被參向、先鳥居前ニ而被之儀アリ、

次入鳥居給、社司一統出向、前行於樓門外、手水氏人奉仕、入于休幕給、

戌半刻比、遷宮催社務以下各着齋服束帶、下具尋常各昇殿、假奉迎、

次供神饌音樂、

次退供、此時勅使執奏參進、

次奉遷宮安鎮、

次奉幣、社務奉仕一統拜儀、

次勅使於拜殿私奉幣訖、入休幕、

次供神饌奏音樂、

次退供、

次入御下殿、

次退下、子半刻斜也、

目代荷田有信日記

天保十年五月廿二日、今日拜殿摸樣替願、陸奥守出頭不破兜太郎出會落手、追テ御沙汰有之旨被申渡也、

七月十日、今日拜殿折揚天井獅子口内願書相認、正官中調印之上伯家へ差出ス、

奉内願口上之覺

一當社拜殿之儀者、從往古神幸之節奉成神輿、遷宮修行仕、其外勅使御參向、并御祈勤行之御場所柄ニ候處、殊之外及大破、此度修覆相催候ニ付、何卒御同列他之御社御同様折上組天井、并御所棟俗稱獅子口等、從仙洞御所御寄附被爲在候様、奉願上候當社者小知之事故、氏子之輩助成ヲ以修覆萬端賄罷在候得者、氏子頭取之者より、一向歎願仕候、右御寄附被爲在候者、追々出精御修覆造畢可仕奉存候、其上例年神幸之節、拜殿狹小ニ而、遷宮之進退不安、萬一過失

之程難斗恐入、從來心配仕候間、此度修覆之序を以、南北建増之催仕度存候ニ付而、茂從御所方一廉之御寄附被爲在、他之御社御同様之御裝飾ニ相成候者、神威茂彌増、造營無滯可成就仕候、一社一同永安、心深難有畏奉存候、彌以國家靜謐、玉體安穩之御祈、可抽丹誠候間、偏奉願上候、此等之趣、宜御披露被成下度、賴入存候以上、

亥七月

正官連署

伯少將殿

御雜掌中

八月三日、西御役所依召午刻出頭、目附方出會、先達願出候拜殿建繼之場所、昨日見分相濟、御奉行へ申上候處、願之通御聞濟之旨被申渡、請書差出、

正祝秦公杓日記

天保十年九月十九日、拜殿先出來、棟包一段之處、獅々口之儀一向御沙

汰無之ニ付、見合居候得共、棟包不致候而、御屋根水廻リ自然爲方不
宜旨、作事方々度々申出候ニ付、無據先棟包爲致、兩方留瓦有合之品先
上候、其内御寄附之御沙汰候ハ、取替可申、自然御不審之儀ハ難斗ニ
付、此段殿下へ申上置候云云、

社務所日記

明治十四年一月廿一日、本日午後奥宮正遷宮

式次第

本日正午神殿以下裝飾ス、
先本殿前ニ被ノ座ヲ設ク、
次祓ノ詞ヲ讀、
次太麻行事、此儀先奥宮内陣以下ヲ祓フ、次神
饌ヲ祓、次宮司以下一同ヲ祓フ、
次宮司昇殿開扉
次同官祝詞ヲ奏ス、

次主典昇殿前ノ翠簾ヲ垂、

次御正體ヲ辛櫃ニ納、

次卷簾、

次出御、主典一名太麻ヲ取テ御先導、主典二名辛櫃ヲ奉昇、附屬ノ辛櫃常備二名奉昇、

此間御行列

次官司奥宮開扉、

次辛櫃ヨリ奉出、安鎮シ奉ル、

次閉扉、

次神饌ヲ供ス、

次官司祝詞ヲ奏ス、

次同官拜禮、

次主典以下拜禮、

次神饌ヲ撤ス、

次各退出、

次直會、

同年三月廿五日、本日假遷宮執行、

同十五年五月一日、本日正遷宮ニ付祭典式左之通、

奉遷式

豫テ兩殿トモ前庭便宜ノ所ニ幄舎ヲ建設シ、渡御ノ道筋左右ニハ境界ノ竹垣ヲ設ケ、權殿及ビ兩馬場先鳥居ノ左右ニ木綿櫛ヲ結附ケ、本殿ヨリ樓門、權殿ヨリ幄舎迄ノ間ニハ、忌竹ヲ凡ソ二間毎ニ立テ、注連繩ヲ引周ラシ、薦ヲ敷延ス、

本日早旦、兩殿トモ内外陣裝束、次ニ本殿及ビ樓門ノ前庭左右ニ眞櫛ヲ樹テ、拜殿ニハ四隅ノ柱ニ木綿櫛ヲ結附ケ、幕ヲ張回ラシ、中央ニ御辛櫃假案五脚ヲ据ユ、

次第

本日午前第九時報鼓、各整服ス、
 第十時報鼓、齋主以下各整列シテ被所ニ進ミ被ヲ修ス、竟テ退出、
 午後第一時報鼓前列賛者以下御太刀以上、社務所前庭ニ進ミ、各標
 下ニ着床、
 次四神旗、御翳、鳳鳥、御錦蓋及ヒ區戸長、五箇郷營繕掛、諸講社總代ハ、
 權殿前庭左右ニ進ミ、各標下ニ着ク、
 次御菅蓋、及ヒ神馬ハ、社務所前石壇上ニ進ミ、各標下ニ並列ス
 次警蹕以下後列樂人權殿ニ進ミ、各標示ノ所ニ着ク、
 次齋主以下帷舎ニ進ミ、着床、
 次地方官帷舎ニ進ミ、着床、手水ノ儀アリ
 次齋主以下昇殿着座、
 此間奏樂

次神饌ヲ傳供ス、

此間奏樂

次齋主祝詞ヲ奏ス、

次齋主玉串ヲ奉リ拜禮、

次奉遷司以下拜禮、

次神饌ヲ撤ス、

此間奏樂

次神饌案ヲ撤却ス、

次賛者起テ前列賛者ニ行進ヲ告ケ、供奉ノ位地ニ進ム、

次道樂ヲ始ム、

次出御、

先下社、

其儀齋主内陣ニ進ミ、御正體ヲ御辛櫃ニ納メ奉ル、奉遷司之ヲ助ク、

次奉遷司御弓箭ヲ執リ奉戴官ニ傳フ、奉戴官之ヲ階上ヨリ神寶奉持者ニ渡ス、奉持者之ヲ奉シテ行列ノ位地ニ立、
次齋主御劔ヲ奉出ス、奉遷司執テ奉戴官ニ傳フ、奉戴官階ヲ下リテ神寶奉持ノ巫子ニ渡ス、巫子之ヲ奉シテ行列ノ位地ニ立、
次奉遷司及ヒ奉戴官、御辛櫃ヲ内陣ヨリ奉出シ、階上ニ於テ奉戴官手扶ニ渡ス、手扶昇奉リテ行列ノ位地ニ進ム、此時御錦蓋ヲ御辛櫃ニ覆ヒ奉リ、御翳鳳鳥ハ其錦蓋ノ前ニ立テ、奉戴官ハ直ニ供奉ノ位地ニ進ム、
次遷幸、
此間奏樂、
次中社、
次上社、
次田中社、

次四大神、
其儀皆下社ノ如シ、唯中社ノミ御辛櫃ノ後ニ神面并命婦ノ從フアリ、
次齋主奉遷司、典禮供奉ノ位地ニ進ム、
次地方官本殿前幄舎ニ進ミ、着床、
次諸講社總代本殿前庭標下ニ着床、
前列既ニ樓門内ニ入レバ、拜殿北方ヲ回リテ前列賛者前驅、及ヒ賢木持、樂人賛者ハ、前拜標示ノ所ニ着床、錦大旗ハ中門上左右ニ、白杖四神旗、并錦小旗ハ本殿前庭左右ニ並列シ、宮本組總代、八乙女ハ南庭、神寶ハ北庭各標下ニ着床、此時典禮歩ヲ進メテ拜殿ニ先着ス、
次拜殿へ入御、
下社御辛櫃ヨリ順次假案ニ奉置シ、警蹕以下各側ニ着床、此時區戸長、五箇郷營繕掛總代ハ本殿前、御錦蓋ハ中門下、各標下ニ着ク、

次齋主奉遷司及ビ後列樂人贊者ハ拜殿ニ着床此時普蓋ハ拜殿西庭ニ神馬ハ樓門下標下ニ並列ス、
 次齋主奉遷司本殿ニ進ミ昇殿着座、
 次本殿并拜殿着床ノ樂人齊シク奏樂ヲ始ム、
 次出御、
 既ニ本殿ノ前庭ニ到レバ、響蹕、太玉串、道敷鹽水、各標示ノ所ニ立列ス、
 次入御、
 先下社、
 其儀奉戴官御弓箭ヲ執テ階下ヨリ奉遷司ニ渡ス、奉遷司之ヲ奉シテ御扉ノ側ニ供ス、此時御弓箭奉持者標示ノ所ニ着ク、以下ノ諸司之ニ同シ、
 次奉戴官御劔ヲ奉シテ昇殿奉遷司ニ渡ス、奉遷司執テ齋主ニ傳フ、

齋主之ヲ内陣ニ納ム、
 次奉遷司及ビ奉戴官殿ヲ下リ、御辛櫃ヲ奉シテ昇殿内陣ニ入ル、
 次御鎮座、
 齋主奉遷司仕奉ル、
 次中社、
 次上社、
 次田中社、
 次四大神、
 其儀皆下社ニ同シ、
 次齋主及ビ奉遷司下殿側ニ伺候ス、
 次典禮本殿ニ進ミ着床、
 次神饌臺ヲ据ユ、
 次神饌ヲ傳供ス、

○御錦蓋 直直直直垂垂垂垂 ○奉戴官手扶直直直直垂垂垂垂 田中社
 ○御辛櫃 ○奉戴官等外衣

○御弓箭 垂直 ○御劔巫子 早千 ○御錦蓋 直直直直垂垂垂垂 ○奉戴官手扶直直直直垂垂垂垂
 ○奉戴官手扶直直直直垂垂垂垂

四大神 ○御辛櫃 ○奉戴官等外衣 ○齋主官司服 ○奉遷司禰宜 衣淨

○典禮主典 衣淨 ○大太鼓 白丁 ○樂人 垂直 ○樂人 垂直 ○同 垂直 ○同 垂直

○同 垂直 ○區長 ○戶長 ○同 ○同 ○同 ○營繕掛總代

○同 垂直 ○同 ○戶長 ○同 ○同 ○同 ○五ヶ郷總代

○同 ○同 ○御翳 丁白 ○鳳鳥 丁白 ○御菅蓋 白丁 ○同 白丁 ○同 白丁

○同 白丁 ○同 白丁 ○舍人 ○舍人 ○神馬 鞍唐 ○舍人 ○神馬 鞍唐 ○舍人 ○舍人
 ○神馬 鞍唐 ○舍人 ○神馬 ○舍人 ○神馬 ○列贊者 垂直 ○舍人 ○舍人

稻荷社事實考證記

一天正十六年九月十七日三神主并竈目代等定當社諸屋形書付如左
 稻荷大明神

- 一本社 燈付六常 一南若王子 一日吉
- 一北若宮 與再 一御料殿 一日御供 與再
- 一竈殿 與再 一樓門二 與再 一寶藏 與再
- 一神輿假屋 裝付束 一鳥居三箇所 與再 一猛尾社 與再
- 一天王社 與再 一熊野權現 一辨財天 大鼓五

- 一 上之御殿 付廻廊 再興 一 奥之命婦
- 一 荷田神 一 御神樂所
- 一 大師堂 一 塔婆 再興 一 御本地堂 再興
- 一 伊勢八幡 再興 一 御廨 再興 一 長者殿
- 一 三之御山末社等 再興 一 田中社末社 一 鳥居等
- 一 拜殿
- 一 寛文十二子年諸屋形書付
- 一 御本殿五社相殿 ウチコシナカシ作 四方ニ高欄有リ、ケ
- 一 若宮五社相殿 ウチコシナカシ作 三方ニ高欄有リ、
- 一 御供所 東西三間、南北二間 一 御輿假屋 東西五間二尺五寸、南北二間四尺
- 一 大黒堂 〇間 數略 一 辨財天 〇間 數略
- 一 上之御殿 カスカ作、ケタ行一間、一尺ハ行二間
- 一 奥命婦社相殿三座 ウチコシナカシ作、ケタ行三間、五寸ハ行二間、四尺五寸

- 一 神樂所 東西一間三尺五寸、南北二間半 一 文殊堂 〇間 數略
- 一 大師堂 〇間 數略 一 拜殿 キリケマ作、四間四方
- 一 樓門 ケタ行五間半、ハリ行二間半 一 鳥居 柱ノ内ノリ、三間
- 一 荷田社 一 伊勢兩宮 一 正八幡宮
- 一 熊野權現社 一 藤尾社 以上
- 末社不及一間之小社、并怠轉之社等、梁行桁行不載之紙面者也
- 一 長者社 一 日吉社 一 若王子社
- 一 蛭子社 一 猛尾社 一 影向社
- 京都御役所向大概覽書五
- 山城國寺社方間數御修復所之事
- 一 稻荷社堂舎
- 御本社 表五間五尺貳寸、奥行四間六尺貳寸 御拜共 禮拜所 表三間三尺、奥行貳間 若宮
- 社 表四間、奥行三間、貳尺 御拜共 大黒天社 〇間 數略 御拜共 辨財天社 〇間 數略 御

拜共 神寶藏 梁行貳間半 楯 廂有 御供所 梁行貳間 床指出 御輿
 宿 梁行貳間四尺四寸 拜殿 梁行四間 手水屋形 梁行六尺八寸
 樓門 梁行四間貳尺五寸

右之外小社七箇所、鳥居貳箇所、所々木柵等御修復有之、

右元祿七戌年、爲御修復料、金子千五百貳拾五兩、大坂御藏金被下之、遷
 宮料米貳百石、社家社僧江被下、二條御藏米相渡ル、修復中小出淡路守
 組與力、松前伊豆守組與力、奉行相勤修復有之、

小出淡路守與力奉行 入江安右衛門

松前伊豆守與力奉行 西尾甚右衛門

◎菟藝泥赴四ノ上

稻荷社 東福寺の南に鳥居二所に立正面に大鳥居有、其北に一
 所あり、是れいなりのとりゐ也、古は三所、今は六所なり、○中
 御料殿 遷宮之假殿 拜殿 御廩 御神樂所

神輿假殿 寶藏 樓門二所 鳥居すべて三所

右彼社家松本氏が説にまかせて記する所也、

◎山州名跡志 十二紀伊郡

稻荷宮 ○中 鳥居 西向木柱丹塗凡當國木柱 樓門 西向 拜殿 同

神殿 同略 若宮 在本殿北西向、辨財天堂 在本殿前北向、

大黑天堂 在本殿前南向、

◎稻荷谷響記

一稻荷社五座相殿 稱本殿是也 西向

右當社ノ間數、表五間五尺貳寸、奥行四間六尺五寸、并御拜所、表
 三間三尺四寸、奥行貳間、但シ丹塗ニシテ、彫物金物飾彩色セリ、
 社廻石垣ヲメグラセリ、

五座相殿ノ神ハ、稻荷三座 上社中社下社ニ、田中社、四大神、二座ヲ合テ

五座ト成奉レリ、應仁燒亡以前マデハ各別殿ニマシマセリ、尤

モ舊跡今ニ存在セリ、○中略

一若宮殿 五座相殿又云權殿、
云假殿又云遷殿、 西向

右ノ社ハ、本殿ノ北、石垣ノ内ニ在ス也、間數、表四間、奥行三間二尺四寸、但シ丹塗、彫物金物ノ飾アリ、

此宮ハ本社造營ノ節、遷宮シ奉ルノ權殿也、故云遷殿、

一上之御殿三座 又云奥之御殿、
又俗云命婦社、 西向

右社ハ、相殿三座、間數、表三間三寸、奥行、貳間四尺五寸、但シ丹塗、彫物金物飾彩アリ、社廻ニ丹塗ノ瑞籬アリ、高サ六尺、長サ廿九間三尺餘也、則テ稻荷山ノ三峰ヨリ下山シ玉フハ此所也、相殿三座ハ、稻荷上社中社下社ノ三名神也、○中略

舍屋諸建物

一鳥居二ヶ所 但一ヶ所ハ云表鳥居也、
又一ヶ所ハ云裏鳥居也、

右各大和大路ノ邊ニアリ、柱各丹塗、高サ四間餘、兩柱ノ間三間

六尺、但裏鳥居、壹丈二尺也、世俗云、當社ノ鳥居ノ柱ハ、太サ當國ニ無類ノ由也、按社司等家記、件ノ大鳥居ハ、大佛殿御建立ノ節、彼材木ノ内ヲ以テ御寄附アリ、慶長年中ニ造立ノ由見ユ、又社司等天正記ニ、鳥居三ヶ所ト云、今在所二ヶ所也、

一樓門 云、太加
止乃

右ノ樓ハ、鳥居ヨリ入ルコト凡貳町半斗東ニ有之、間數、梁行貳間貳尺五寸、桁行四間五尺、但丹塗ニシテ、彫物金物飾彩レリ、一拜殿

右ノ殿ハ、本殿ト樓門トノ間ニアリ、間數、梁行四間、桁行四間、但丹塗ニシテ、彫物金物飾彩レリ、又左右ニ三十六歌仙ヲ掛ク、近衛准后家熙公ノ御染筆也、

一神樂所 又云舞殿、 南向

右ハ、本殿ノ前北寄り、元祿七年マデ上御殿ノ神前南寄りニア

一 神供所 又云御食殿 北向

右ハ、本殿ノ前南寄りニ在リ、一切ノ供物ヲ調ヘ、神食ヲ炊キ、調進スル所也、因テ云神供所也、間數、梁行貳間、桁行八間、外廂貳尺、中貳尺、

一 神輿假屋 有神輿五基 西向

右ハ、本殿ノ後ニアリ、間數、梁行貳間、四尺、桁行五間、三尺、五寸、但丹塗也、

一 寶藏 又云神庫 北向

右ハ、神寶ヲ納ムル所也、間數、梁行貳間、桁行三間半、廂七尺、二四尺也、

一 繪馬納所 西向

右ハ、上ノ御殿ノ後ノ丘ニアリ、間數、梁行壹間、桁行三間、丹塗也、

繪馬ヲ納メ置ク所也、

一 繪馬掛所二ヶ所 東向

右ハ、樓門ノ左右ニアリ、間數、各梁行壹間半、桁行延十間、宛也、各丹塗、繪馬ヲ掛ル所也、

一 手水屋貳ヶ所 各有井 西向

右ハ、本殿ノ前石垣外左右ニアリ、間數、各梁行六尺八寸、桁行壹尺五寸、宛也、各丹塗也、

一 手水所

右ハ、上之御殿ノ麓ニアリ、

◎ 稻荷社事實考證記

一元祿七年御修理以後當時諸屋形

一 御本殿五座相殿、表五間、五尺貳寸、奥行四間、六尺五寸、并御拜所、三間、三尺四寸、奥行貳間、但丹塗彫物彩色セリ、
社廻石垣ヲメクシラセリ、

- 一大鳥居 一下馬札 一御制札 一藤尾社廻り玉垣 一熊野社
- 一樓門先達修葺中=御座候事 一廻廊右同 一拜殿右同 一手水屋
- 形所貳ヶ 一神樂所 一寶藏 一大黒天堂 一辨財天堂 一神
- 供所同并戸 一御本殿文化十四年丑十二月御内陣其儘ニテ外廻リ之儀
- 奉願當辰六月御内陣廻リ修葺之儀奉願候處 悉御許容被成下候ニ付修葺中ニ御座候事 一若宮殿右同
- 一長者社 一荷田社 一両宮社 一弘法大師堂 一文殊堂
- 一上御殿御本殿 一白狐社右同 一繪馬納所 一繪馬掛所
- 一北之鳥居文政二卯九月御願修葺中ニ御座候事 一神馬屋 一參籠舎 一田中
- 社文政二卯年九月社廻リ并瑞巖中門鳥居トモ修葺御願申上修葺中ニ御座候事 一御旅所 一古御旅

右之通御座候以上

辰四月

稻荷社

◎花洛名勝圖會東山

稻荷神社

若宮本社の右傍の後に 神輿殿若宮の左 辨財天社本社の左傍

御供殿辨天社のあり 寶庫二ヶ所御供殿 大黒堂本社の左 神樂殿大

堂に 拜殿本社の正面石 愛染堂境内の北 愛染寺愛染堂の西に

聖天堂愛染堂に並 大師堂上の前の傍 文殊堂上の傍の

り、繪馬舎愛染堂の向ふ 樓門西向左右 大鳥居西向正面伏見街

て造る、丹塗なり、北鳥居道上に同神幸

官幣大社稻荷神社明細圖書

一本社建築年度及由緒

天正十七年八月、秀吉公ノ御沙汰ヲ以テ造營セラル、今ノ本殿ハ
此時ノ儘ナリ、

古昔ヨリ造營修繕等、舊記ニ散見スル所ヲ以テ左ニ記ス、

一延喜八年八月、贈太政大臣藤原時平公執舉始テ三箇社ヲ造營、

一文治三年八月廿六日、鎌倉將軍御沙汰ヲ以テ、下社中社上社正殿諸神殿造營、

一寛元四年二月廿三日、上下殿造營、

一元祿七年十一月、關東御沙汰ヲ以テ修覆、

一文政五年十一月、官府御沙汰ヲ以テ修覆、

附錄

本殿 五軒社造、前拜 面唐破風造、但檜造丹塗、

此建坪五拾六坪壹分八厘、

桁行柱外面ニテ六間三尺、

軒桁上ハヨリ椽束石口マテ壹丈九尺貳寸、

内陣桁行六間三尺、

大床桁行六間三尺、内々陣、内陣トモ格天井、

椽四方長延貳拾貳間四尺貳寸、

同巾四尺五寸、

同高欄四方長延貳拾六間三尺六寸、

同柱徑壹尺壹寸五分、

前拜出柱眞ヨリ茅負外面マテ七尺七寸六分、

同妻同貳間壹尺、石口マテ壹丈五尺七寸、

同角柱壹尺貳寸、茅負外面マテ六尺貳寸、

同軒出柱眞ヨリ、

同玉垣 天井屋根裏、

同同 四方長延三拾貳間、

同同 柱貳寸八分角、

權殿 若宮殿トモ稱ス、

此建坪貳拾三坪九分五厘、

桁行柱外面ニテ五間八分、

内々陣桁行五間、椽束石口マテ壹丈四尺九寸、

屋根瓦葺四坪六分

建築年度不詳

能樂殿橋掛り鏡之間樂屋共
檜白木造

此建坪五拾三坪五分

能樂殿

正面柱外面ニテ三間壹尺六寸

妻同 四間三尺八寸

丸桁上ハヨリ石口マテ壹尺八寸五分

床同 貳尺八寸

脇座巾三尺

橋掛り

梁間壹間壹尺

軒出柱上ハヨリ石口マテ壹尺七寸五分

鏡ノ間

正面柱真々壹間三尺六寸六分

奥行同 貳間五尺

軒桁上ハヨリ石口マテ壹丈三尺四寸五分

柱五寸四分角

樂屋

表桁行四間貳尺壹寸

裏桁行柱真々三間四尺壹寸五分

傳イ

梁行長延九間三尺

使所

梁行壹間

小家

梁行貳間壹尺

同小家

桁行貳間六寸五分、
梁間壹間三尺五寸、

屋根檜皮葺百拾貳坪八分、

柿葺貳拾九坪九分、
棟瓦長延拾七間三尺六寸、

明治十五年三月願濟寄附建築

神饌所

此建坪三拾壹坪七分貳厘、

桁行八間四尺五寸、
梁間貳間壹尺五寸、

軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈貳尺、
後庇桁行六間三尺七寸、

同 梁間壹間三尺、
柱四寸角、

天井竿縁ヨリ茅負外面マデ三尺五寸五分、
軒出柱真ヨリ茅負外面マデ三尺五寸五分、

椽巾貳尺五寸、
同長サ貳間壹尺四寸、

屋根瓦葺四拾貳坪四分、
棟瓦長延拾六間、
但降リ棟トモ、

庇柿葺九坪四分、
建築年度不詳、

神輿庫

此建坪貳拾六坪壹分、

桁行八間壹尺、
梁間三間壹尺貳寸、

軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈六尺、
表庇シ桁行八間壹尺、

同 梁間三尺、
裏庇シ桁行九間四尺、

同 梁間三尺、
表軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈貳尺、

裏軒同、
裏軒瓦葺五拾三坪貳分、
壹丈七寸、

棟長延拾五間三尺六寸、
但角棟トモ、

明治十四年五月寄附改造

寶庫

此建坪貳拾坪九分七厘、

桁行五間四尺三寸
 梁間三間貳尺三寸
 軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈貳尺八寸
 前庇桁行貳間壹尺五寸
 同 梁間四尺八寸
 同 軒桁上ハヨリ石口マデ九尺貳寸
 屋根瓦葺三拾壹坪四分
 棟五間八分

建築年度不詳

拜殿 檜造丹塗

此建坪四拾六坪五分

桁行柱外面ニテ七間七寸
 梁間同 四間七寸
 丸桁外角ヨリ石口マデ降壹丈八尺貳寸
 函棟上ハヨリ石口マデ降三丈六尺九寸
 椽四方長延貳拾五間三尺六寸
 同出三尺九寸
 同四方高欄長延貳拾七間五尺
 同高欄高サ壹尺九寸
 同板上ハヨリ石口マデ三尺四寸
 二軒出柱眞ヨリ茅負外面マデ六尺
 柱七寸角
 玉垣四方長延三拾壹間三尺五寸

同高サ三尺六寸 屋根檜皮葺百六拾九坪八分

建築年度修營本社ニ同シ、○天保十年九月模様替建増

樓門 檜松釋造丹塗

此建坪拾五坪六分三厘

桁行柱外面ニテ五間貳尺五寸
 梁間同 貳間五尺五寸
 丸桁上ハヨリ石口マデ降貳丈七尺八寸
 函棟上ハヨリ石口マデ降四丈八尺三寸
 椽出柱外ニテ石口マデ壹丈七尺九寸
 同四方長延拾九間貳尺
 同欄四方長延貳拾貳間
 同高サ貳尺四寸
 二軒出組柱眞ヨリ茅負外面マデ壹丈壹尺
 屋根檜皮葺百六拾貳坪

建築年度修營本社ニ同シ

廻廊 南北共檜造丹塗

此建坪拾七坪四分但南北共

桁行柱外面ニテ五間三尺五寸
 梁間同 壹間三尺五寸
 軒出柱上ハヨリ石口マデ壹丈、
 軒出柱真ヨリ茅負外面マデ三尺五寸、
 屋根檜皮葺六拾七坪七分、但南北共

建築年度修營本社ニ同シ、

社務所并集會所檜白木造

社務所建坪三拾壹坪五分

桁行柱真々六間五尺七寸、
 梁間同 三間壹尺六寸八分、
 丸桁上ハヨリ石口マデ壹丈三尺五寸五分、
 椽長延八間三尺四寸三分、
 同巾 三尺四寸五分、
 同板上ハヨリ石口マデ貳尺八寸、
 廣椽長貳間壹尺、
 同巾壹間、
 妻柱真ニテ壹間四尺三寸、
 天井竿縁ニテ壹間四尺三寸、
 屋根瓦葺五拾六坪八分、
 棟長延七間四分、但降棟隅棟共

集會所建坪百貳拾五坪七分貳厘

桁行表立間之間ヨリ廣間北側マデ拾壹間四尺七寸三分、
 梁間東拾五間之間ヨリ西土間マデ拾間壹尺五寸六分、
 立間柱真ニテ壹間三尺四寸三分、
 同妻同 壹間三尺四寸三分、
 同丸桁上ハヨリ石口マデ壹丈貳尺五寸貳分、
 立間之間軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈五尺七寸、
 軒出柱真ヨリ茅負外面マデ三尺六寸七寸五分、
 臺所之間軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈七寸五分、
 入口土間軒桁上ハヨリ石口マデ八尺、
 椽長延貳拾貳間、
 同巾四尺、
 竿縁天井、
 廣間格天井、
 風呂場桁行貳間四尺壹寸四分、
 同根瓦葺百三拾七坪三分、
 棟長延四拾間八分、但降棟隅棟トモ、
 立間檜皮葺八坪八分、
 庇シ柿葺四拾六坪貳分、

明治十四年六月寄附建築

社務分局檜造丹塗

此建坪拾五坪九分四厘

桁行柱外面ニテ四間貳尺八寸
 梁間同 三間貳尺壹寸五分
 柱四寸八分角
 軒桁上ハヨリ石口マテ壹丈壹尺四寸
 軒出柱變ヨリ茅負外面マテ六尺壹寸
 天井竿縁
 椽長サ貳間壹尺巾三尺貳寸
 屋根檜皮葺七拾坪
 棟瓦長四間壹尺
 瓦葺八坪五分

建築年度不詳

文庫

此建坪六坪七分

桁行貳間五尺六寸
 梁間貳間貳尺三寸
 軒桁上ハヨリ石口マテ壹丈三寸五分
 庇軒桁同 壹丈五寸
 同桁行壹間五寸
 梁 四尺六寸
 屋根瓦本葺拾三坪四分

建築年度不詳

○旅所

山槐記

仁安二年天皇四月廿三日庚寅今夜爲御方違行幸鳥羽殿先々幸八

條堀河顯長卿家而彼近邊有稻荷旅所仍有此議

百練抄八

治承二年三月廿四日子刻炎上入道俊盛卿修理大夫信隆左京大夫修

籠三位中將知盛卿等家并故家保卿七條東洞院堂家成卿家號稻荷

旅所等燒亡

嘉祿二年二月十三日午時稻荷上中兩社旅所八條坊燒亡是日行事則

正旅所被改易之間則正愁望之餘參籠下殿燒死云云御體同燒失云云

資益王記

文明十四年閏七月廿日稻荷二階社御旅所顛倒昨夜風故云云

旅所舊神主生嶋氏所藏文書

稻荷大明神御旅所由緒書

一 稻荷大明神御旅所者、弘法大師御在世之時、弘仁十四年四月十三日、日域江出現之節、梅小路猪熊神宿候處ニ、い地無之ニ付、七條油小路御旅壹箇所被立置、數百年來神事祭禮勤來候處ニ、九十年以前、油小路御旅所出屋敷ニ罷成候へば、替地ニ當御旅所信濃小路ニ御下行ニ付、今至別條無御座候事、

一 梅小路古御旅所之儀、日域出現之地、垂跡之地御座候へハ、于今其通ニ立置、尤信濃小路當御旅何方江替り候へる、毎年之神事祭禮ニ御神差御留主神之祇式相勤申ニ付、于今社鳥居御座候、其上御旅所之諸社修覆等之節ハ、五社之大明神之奉移申御事、

一 毎年神事祭禮ハ、三月之午ニ御出、四月卯之日還御被成候、則毎年

御繪旨被爲下頂戴仕候從往古于今、神事勤來リ申候御事、
右之通由緒書仕指上、御斷申上候以上

稻荷御旅所神主

延寶六年

田中久太輔

午二月七日

生島 右京

御檢地

御奉行様

覺

一 五拾壹間半

稻荷社御旅所宮地

一 貳拾九間

同 西御旅所下社宮地

右者先規々御赦免地、往古より神祕御座候而、于今執行神事相勤申社地ニ而御座候以上、

稻荷御旅所神主

延寶六年

田中久太輔

二月

生嶋 右京

伴九郎左衛門様

延寶七年檢地帳

一五反八畝拾步五拾間

稻荷旅所境内

是者從往古除地依無紛除之

一貳反五畝廿五步參拾壹間

稻荷古旅所境内

是者從往古除地依無紛除之

◎雍州府志三神社門

齋場所 稻荷御旅所在油小路七條南弘法大師營東寺時八幡爲

土地神而後稻荷神現出暫寓芝守長者家歷年月移稻荷山今旅所

則芝守之宅地也祭祀時神輿在茲二十日斯遺風也見于東寺緣起

○又見于京羽
二重織留大全

◎菴藝泥赴二

稻荷御旅所 猪熊東油小路西九條北三月末の午日いなりのお

いてとて稻荷神輿五基お山を出給ひて四月上旬の卯日まで此所

におはします

◎國花萬葉記一ノ下

稻荷御旅所 油小路七條の南芝守長者跡

◎山城名勝志五下洛陽

稻荷上中兩社旅所

今八條坊門猪熊在小祠俗號稻荷古御旅所

稻荷旅所

拾芥抄京程圖稻荷社在梅小路大宮東

今按是古下社御旅所乎今旅所五座一所針小路南油小路西

九條坊門北

◎山城志 紀伊郡

稻荷神社三座

其神幸之地在京師油小路西九條坊門北○又見于京

◎諸國中行事大成三月

九條の御旅所に至る○中此地は古しへ芝守長者が宅地なりとぞ、

◎稻荷神社考下

山上の社より三座の神輿を旅所中古には八條坊門猪熊に上中の社あり下社のは梅小路大宮東に在しなるべしと云り今世の旅所は五社に渡し奉るなり一所にて針小路南沖小路西九條坊門北にあり

官幣大社稻荷神社明細圖書

境外末社命婦社舊來御旅所明細圖書

一京都府山城國葛野郡西九條村字鳥居口鎮座○中

一由緒 詳ナラズ往古ヨリ此社地ヲ以テ御旅所トシ毎年四月第二

一創立年月日 不詳

一境内坪數 壹千七百五拾五坪 官有地第一種

一本社へノ距離凡三拾貳町餘

上命婦社 檜白木造

此建坪貳坪三分五厘

桁行柱外面ニテ九尺貳寸 梁間同 九尺貳寸

軒杭上ハヨリ石口マテ降九尺壹寸 柱四寸五分角

屋根瓦葺七坪壹分

下命婦社 檜白木造

此建坪貳坪三分五厘

○桁行以下上命婦社ニ同ク

北御旅殿 檜造丹塗

此建坪壹坪八分七厘

桁行壹間壹尺七寸

梁間壹間貳尺八寸

前上ハヨリ石口マデ七尺五寸五分

九柱徑五寸

玉垣四方長延拾間貳尺五寸

同高峰ヨリ石口マデ六尺

屋根檜皮葺拾貳坪五分

明治十五年五月願濟改造寄附

南御旅殿 檜造丹塗

此建坪壹坪三分八厘

桁行壹間貳尺七寸

梁間壹間貳尺七寸

軒桁上ハヨリ石口マデ九尺壹寸

前拜桁上ハヨリ石口マデ八尺

柱四寸角

屋根檜皮葺拾三坪五分

太神宮 檜白木造

此建坪壹坪七分六厘

桁行壹間貳尺

梁間壹間貳尺

軒桁上ハヨリ石口マデ七尺六寸五分

柱三寸八角

屋根柿葺八坪八分四厘

北神樂所 檜白木造

此建坪貳拾坪九分

桁行六間三尺

梁間三間壹尺三寸

軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈三尺貳寸

柱七寸角

屋根瓦葺五拾六坪四分

廊下

此建坪拾貳坪八分三厘

桁行五間三尺四寸

梁間貳間三寸

軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈

柱五寸角

屋根瓦葺拾九坪七分七厘

神饌所

此建坪拾八坪

桁行五間貳尺貳寸

梁間三間貳尺貳寸

軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈貳尺六寸

柱五寸角

屋根瓦葺三拾四坪五分六厘

三社神輿舍檜白木造

此建坪拾八坪四分

桁行五間貳尺七寸

梁間三間貳尺貳寸五分

丸桁上ハヨリ石口マデ壹丈四尺貳寸

柱七寸角

屋根柿葺七拾六坪四分

田中社神輿舍檜白木造

此建坪拾坪

桁行三間五尺壹寸五分

梁間貳間三尺六寸

軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈三尺

柱六寸角

屋根柿葺三拾八坪四分

詰所

此建坪四拾七坪六分

桁行九間五尺三寸八分

梁間南五間貳尺七寸北四間五尺貳寸八分

南入口軒桁上ハヨリ石口マデ八尺貳寸

北入口軒桁上ハヨリ石口マデ八尺壹寸

屋根瓦葺六拾四坪六分

上社神輿舍檜白木造

此建坪拾壹坪三分

桁行三間貳尺

梁間貳間三尺五寸

-11 288 10 460" data-label="Text">

軒桁上ハヨリ石口マデ壹丈三尺五寸

-37 288 10 460" data-label="Text">

庇軒桁上ハヨリ石口マデ八尺壹寸

-63 288 10 460" data-label="Text">

庇桁行貳間三尺

-89 288 10 460" data-label="Text">

同梁間壹間五寸

-115 288 10 460" data-label="Text">

屋根柿葺四拾坪

南神樂所檢白木造

此建坪貳拾壹坪

桁行五間四尺五寸

梁間三間壹尺九寸
軒桁上ハヨリ石口マテ壹丈貳尺四寸

柱六寸角
庇桁行壹間五尺貳寸五分

同梁間壹間四寸五分
屋根瓦葺三拾七坪八分

會所

此建坪三拾六坪九分

桁行四間五尺八寸

梁間五間五尺
軒桁上ハヨリ石口マテ九尺貳寸

庇桁行四間
同梁間貳間

屋根瓦葺七拾三坪七分

○神階

從五位下

類聚國史三十四帝王

淳和天皇天長四年丁未正月辛巳詔曰天皇詔旨止稻荷神前爾申給止

申久頃間御體不愈大坐爾須依氏占求爾稻荷神社乃樹伐留禮罪崇爾出利

止申須然毛此樹波先朝乃御願寺乃塔木爾用我牟爲爾止東寺乃所伐奈

今成崇止利我故爾畏毛奈內舍人從七位下大中臣雄夏乎差使天禮代

爾從五位下乃冠授奉理治奉留實爾神乃御心爾坐波御病不過時日除

愈給倍縱比神乃御心波爾不在毛威神乃護助給牟力爾依天之御躬波安利

平支給止牟所念食止奉憑流申給布天皇詔旨乎申給波久申

日本紀略十四

天長四年春正月辛巳詔曰天皇詔旨止稻荷神前爾云云御體不健御坐

須爾依天占求爾稻荷神社乃樹伐留禮罪崇爾云云

從五位上

續日本後紀十三

承和十年天仁明十二月戊午奉授從五位下稻荷神從五位上

從四位下

續日本後紀十四

承和十一年十二月丁亥、奉授從五位上稻荷神從四位下、

從四位上

文德實錄二

嘉祥三年○文德天皇十月辛亥、進山城國稻荷神階、授從四位上、

正四位下

文德實錄九

天安元年四月乙酉、在山城國從四位上稻荷神三前、各授正四位下、

三代實錄二

正四位上

貞觀元年○清和天皇正月廿七日甲申、奉授正四位下稻荷神三前並正四位

上、

三代實錄二十五

從三位

貞觀十六年閏四月七日乙丑、山城國正四位上稻荷上中下三名神、並奉

授從三位、告文曰、天皇我詔旨止、稻荷神乃廣前爾申賜止、申久京都爾近

之公私爾崇仰禮坐須、御德高利與御冠猶卑爾依利天殊爾有所念行天從

三位乃御冠爾上奉利崇奉流此狀乎神祇大副從五位下大中臣朝臣有
本乎差使天御位記乎令捧持天申奉出須奈加聞食天天皇朝廷乎寶
祚無動久常磐堅磐爾護幸倍奉賜比天下平安爾之水旱之災疫癘之憂
無聞久風雨順時比五穀豐登世之給波彌高彌廣爾榮飾利崇奉止无申賜
止波久申、

日本紀略一

正三位

延喜元年○醍醐天皇九月十五日、授從三位稻荷神正三位、

扶桑略記裏書廿三○此裏書古本作外記日記可從

延喜元年辛酉九月十五日癸亥、稻荷三箇所大明神奉授正三位、

日本紀略二

從一位

天慶三年○朱雀天皇九月四日丙寅、奉授正二位稻荷神從一位、

◎驗の杉

此前の正二位に叙されし事は書どもに見えず、今考るに、天慶三年

正月諸國諸神に一階を増奉られたる事古記どもに見えられたれば其
度一階進て正二位になりておはしけるを同年の九月殊さらば又
一階を進めて從一位を授け給ひたりしなり、

◎神祇志料六

按正二位に叙されし事書どもに見えず是歲正月天下諸神一階を
増奉る時進給ひしなるべし、

二十二社註式

正一位

稻荷社 御位記

人皇六十一代朱雀院治十年庚子八月廿八日從一位略○中此後諸神一階
度々也、極位勿論也、

諸神記上

一稻荷

御位記 天慶三年八月廿八日從一位、此後諸神一階度々也、極位

勿論也、○又見于諸
社根元記、

◎稻荷神社考下

此後極位に至給は、本朝世紀云、天慶五年四月十一日、今日初請印
坐京中并山城國諸神位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被禱討滅
賊類、後天下諸神可被增加位一階之由、但至于極位之神可被奉寄封
戸者、とみれたれば、此時正一位授奉られたるなりけり、

◎稻荷社事實考證記上

當社正一位被奉授候年月日之事、先社家御位記應仁ニ燒失社傳
之趣申上有之候得共、更ニ廣橋前大納言伊光卿御考、内々依仰ノ儀ト拜承右
年月日相知レ候ニ付武家武邊江茂御達ニ付文化二年九月廿三日、
執奏伯三位殿江茂以來可相改旨社司へ可申渡旨、武家傳奏列座ニ
而伯卿、被申渡、依之執奏家召狀到來、公林爲絢兩人總代參之處、社
傳可相改左之通書付被渡候也、

本朝世紀、天慶五年四月十一日、坐京中并山城國諸神位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被禱討滅賊類、後天下諸神可被增加位一階之由、但至于極位之神、可被奉寄封戶者、右之通候故、先達正一位、應仁三年三月廿六日被授候段申上候得共、右相違之處、社傳可相改被仰渡候也、依同月廿四日、御奉行所江茂被仰渡之趣、斷書付、公府親益兩人持參云云、

○社 格

延喜式九神名

山城國紀伊郡稻荷神社三座、並名神大、月次新嘗

續日本後紀十五

承和十年仁明天皇乙丑十二月庚辰、從四位下稻荷神、預名神例、

延喜式三臨時祭

名神祭二百八十五座中 稻荷神社三座、

朝野群載十二內記

廿二社奉幣次第中

稻荷

宣命紙 伊勢縹紙 賀茂紅紙 自餘社皆黃紙

奉幣使中 稻荷四位一人

伊呂波字類抄仁諸社

二十二社中 稻荷

諸神記上

二十二社次第

上七社

伊勢 石清水 賀茂 松尾 平野 稻荷 春日諸社根元記同

二十二社本緣

稻荷事

中古以來列志天官社仁加惠上七社仁給無上神座歟

二十二社註式

二十二社次第幣數

上七社

伊勢、石清水、三本賀茂、二本松尾、同平野、四本稻荷、三本春日、四本

二十一社記

二十一社分賀茂下上爲二社則二十二社也

上七社

伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日

拾芥抄下本諸社

二十二社略○中 稻荷山城四位一人勅使三前

二十二社註式

二十二社事

入皇六十二代村上天皇治十九年康保二年乙霖雨經月九天覆雲依之

閏八月廿一日被奉獻於十六社止雨略○中

稻荷

第六十六代一條院治五年正曆二年卯炎天送日萬物變色依之六月廿

四日祈雨奉幣時略○中被奉獻官幣爲十九社

第六十六代一條院正曆五年二月十七日祈年祭時加梅宮被奉獻官幣

爲二十社

第六十六代一條院治十年長德元年乙二月廿五日被奉獻臨時官幣之

日加祇園社爲廿一社

第六十九代後朱雀院長曆三年卯巳八月十八日被奉獻官幣之日加日吉

社爲廿二社○又見于諸神記

太政官日誌明治四年第二十七號五月十四日

官社

○官幣大社略○中

稻荷神社 山城國
○中略

以上三十五社神祇官所祭爲官幣社

○神領

三代實錄十

貞觀七年○清和天皇四月十七日丁卯勅奉充諸明神神田○中略稻荷神三段

○中略並以山城國愛宕紀伊乙訓葛野等郡得度除帳田充之

新抄格勅符抄神封

諸神新封 本封之外合加私注付

稻荷十戸○山城國
○中略已上新封

○按スルニ此新封ノ年月ハ此書伊勢大神封戸ノ條下ニ天慶三年

八月廿七日奉寄トアリ之ヲ他書ト参考スルニ稻荷社ノ新封モ此
時ナルヘシ

稻荷神社古文書

雜訴決斷所牒

稻荷社

當社領加賀國味智郷内水田貳拾町事

右任壽永二年九月 日院廳下文并文治二年九月五日關東下文同三
年三月廿日留所下文正嘉二年二月廿七日勅裁院宣等宜令管領者以
牒

建武元年九月四日

左衛門尉平朝臣

儀同三司藤原朝臣

采女正中原朝臣

正二位 藤原朝臣

散位 宇佐宿禰

正三位 藤原朝臣

左衛門大尉中原朝臣

主税頭中原朝臣

前伊勢守小槻宿禰
右少辨藤原朝臣

○ 花押 ○ 足利義滿

稻荷社領洛中散在田畠林名主職以下事任文永帳於當知行之在所者社家領掌不可有相違之狀如件

○ 應永三年三月廿二日

○ 稻荷社領加賀國針道庄事於代官職號帶先神主契狀雖有申族任當知行之旨自今以後致直務可專神用之狀如件

○ 應永十八年八月廿八日

○ 內大臣源朝臣花押 ○ 足利義持

稻荷社領加賀國針道庄事所返付社家也早退社僧等之違亂全領知可專神用之狀如件

○ 長祿二年十二月廿六日

○ 內大臣兼右近衛大將源朝臣花押 ○ 足和義政

○ 花押 ○ 足利義政

稻荷社領山城國紀伊郡內散在田畠名主職以下事早任文永帳并當知行之旨社家領掌不可有相違之狀如件

○ 寬正四年五月十二日

○ 當社家境內地子以下事令免除詔永々不可有相違者也

○ 天正十七

○ 十二月朔日朱印 ○ 豐臣秀吉

稻荷社家中

○ 山城國爲山科郷替地、以稻荷廻出米内拾七石九斗、當知行入拾八石引、集合百六石事遣之訖、全可領知候也、

天正十七

十二月十日朱印 ○ 豊臣秀吉

稻荷社家中

○ 當社領山城國稻荷廻百六石、全可社納、并境内諸役以下令免除之狀如件、

元和元年七月廿七日朱印 ○ 德川家康

稻荷社家中

○ 當社領山城國稻荷廻百六石事、并境内諸役等、彌任去元和元年七月廿七日先判之旨、永不可有相違之狀如件、

元和三年七月廿一日朱印 ○ 德川秀忠

稻荷社家中

○ 當社領山城國稻荷廻百六石事、并境内諸役等、免除任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、兩先判之旨、永不可有相違之狀如件、

寛永十三年十一月九日朱印 ○ 德川家光

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等、免除任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、社家中進止、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日朱印 ○ 德川家綱

稻荷社家中

○
稻荷明神社領山城國紀伊郡社廻百六石事并境內諸役等免除任元和元年七月廿七日同三年七月廿一日寬永十三年十一月九日寬文五年七月十一日先判之旨社家中進止永不可有相違者也

貞享二年六月十一日

朱印 ○ 德川綱吉

稻荷社家中

○
稻荷明神社領山城國紀伊郡社廻百六石事并境內諸役等免除依當家先判之例社家中進止永不可有相違者也
享保三年七月十一日

朱印 ○ 德川吉宗

稻荷社家中

○
稻荷明神社領山城國紀伊郡社廻百六石事并境內諸役等免除依當家先判之例社家中進止永不可有相違者也

延享四年八月十一日

朱印 ○ 德川家重

稻荷社家中

○
稻荷明神社領山城國紀伊郡社廻百六石事并境內諸役等免除依當家先判之例社家中進止永不可有相違者也

寶曆十二年八月十一日

朱印 ○ 德川家治